

茨城県古河市

上 耕 地 遺 跡

倉 庫 建 設 に 伴 う
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

2008年1月

株式会社 ブリリアントフューチャー
古 河 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 原 史 文 化 研 究 所

茨城県古河市

か み こ う ち
上 耕 地 遺 跡

倉 庫 建 設 に 伴 う
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

2008年1月

株式会社 ブリリアントフューチャー
古 河 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 原 史 文 化 研 究 所

序

豊かな自然に育まれた地方都市である古河市は、「許我」と万葉集に詠われた古代以前より人々が生活を営んでいました。市域を南北に貫流して利根川に注ぐ河川流域には、多くの遺跡が確認されています。これらの遺跡は、当時の人々の生活や環境を私たちに伝える先人たちが残した何ものにも代えがたい文化遺産です。このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちに課せられた責務です。

このたび、株式会社ブリリアントフューチャーの倉庫建設に伴い、上耕地遺跡の一部について平成19年10月から平成19年11月まで記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果、当該地区は古墳時代前期の集落跡の一部であることが明らかになり、大きな成果を上げることができました。本調査報告書が古河の古代文化究明の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なる御理解と御協力を賜りました株式会社ブリリアントフューチャー、ならびに御指導いただきました茨城県教育庁文化課をはじめ、関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成20年1月

古河市教育委員会

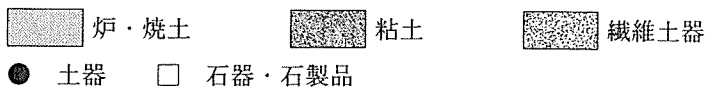
教育長 松原 俊二

例 言

- 1 本書は、株式会社ブリリアントフューチャーの倉庫建設に伴う、茨城県古河市大山字上耕地1758-1に所在する上耕地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、古河市教育委員会による試掘調査に基づいて、株式会社ブリリアントフューチャーが開発する倉庫施設敷地のうち約650㎡を対象とした。
- 3 調査にあたり、株式会社ブリリアントフューチャー（甲）、古河市教育委員会（乙）、有限会社原史文化研究所（丙）の三者で協定書を取り交わし、古河市教育委員会の指導のもと有限会社原史文化研究所（調査担当：柿沼修平）が実施した。
- 4 調査にかかる費用は、株式会社ブリリアントフューチャーが負担した。
- 5 発掘調査は、平成19年10月17日から平成19年11月2日まで行い、整理調査・報告書作成は、有限会社原史文化研究所にて平成19年11月5日に開始し、平成20年1月31日の報告書刊行をもって終了した。
- 6 本調査における出土遺物及び実測図・写真等は、古河市教育委員会が保管している。
- 7 本報告書の編集は、古河市教育委員会の指導のもと、柿沼が担当した。執筆は、第1章第1節を古河市教育委員会、第3章第3節の第1・2・4号住居跡は渡邊大士、第3号住居跡は宮本武美が執筆し、その他は柿沼が執筆した。写真撮影・実測・トレースは柿沼、千田利明が行った。
- 8 調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々からご指導、ご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

株式会社ブリリアントフューチャー 茨城県教育庁文化課 （敬称略）

凡 例

- 1 地形図は、国土地理院1/25,000「古河」「栗橋」を使用した。
- 2 X, Y軸による座標値は、日本平面直角座標第IX系及び世界測地系（JGD2000）に準拠する。
- 3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。
遺構 住居跡-S I 柱穴・貯蔵穴-P 土層 攪乱-K
- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は250分の1、遺構は60分の1に縮小して掲載した。
 - (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合もある。
 - (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

● 土器 □ 石器・石製品
- 5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 6 「主軸方向」は、竪穴住居跡については炉の中心を通る軸線とし、座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E, N-10°-W）
- 7 遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。
 - (1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位はcmで示した。
 - (2) 備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

目次

序

例言・凡例

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 古墳時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
2 その他の遺物	20
第4節 総括	22

写真図版

抄録

挿図目次

第1図 調査区の位置	1	第10図 第2号住居跡出土遺物実測図	14
第2図 遺構全体図	2	第11図 第3号住居跡実測図	15
第3図 遺跡の位置①と周辺遺跡分布図	4	第12図 第3号住居跡出土遺物実測図	16
第4図 基本層序	7	第13図 第4号住居跡実測図(1)	18
第5図 第1号住居跡実測図(1)	9	第14図 第4号住居跡実測図(2)	19
第6図 第1号住居跡実測図(2)	10	第15図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)	19
第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)	10	第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)	20
第8図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)	11	第17図 その他の遺物実測図	21
第9図 第2号住居跡実測図	13		

写真図版目次

P L 1 1. 遺跡遠景(東から)	27	P L 5 1. 第3号住居跡	31
2. 遺跡近景(北東から)		2. 炉	
P L 2 1. 遺跡完掘状況	28	3. 貯蔵穴	
2. 調査区南壁土層断面(1)		4. 貯蔵穴内遺物出土状態	
3. 調査区南壁土層断面(2)		5. 遺物出土状態	
4. 遺構確認状況		P L 6 1. 第4号住居跡	32
5. 遺構発掘状況		2. 炉	
P L 3 1. 第1号住居跡	29	3. 炉断面	
2. 炉		4. 遺物出土状態(1)	
3. 貯蔵穴		5. 遺物出土状態(2)	
4. 遺物出土状態		P L 7 第1号住居跡出土遺物	33
5. 南辺炭化材出土状態		P L 8 第2号住居跡出土遺物	34
P L 4 1. 第2号住居跡	30	P L 9 1. 第3号住居跡出土遺物	35
2. 炉		2. 第4号住居跡出土遺物(1)	
3. 貯蔵穴		P L 10 1. 第4号住居跡出土遺物(2)	36
4. 貯蔵穴土層断面		2. その他の遺物	
5. 遺物出土状態			

表目次

表-1 上耕地遺跡周辺遺跡一覧表	5	表-5 第4号住居跡出土遺物観察表	17
表-2 第1号住居跡出土遺物観察表	8	表-6 古墳時代竪穴住居跡一覧表	20
表-3 第2号住居跡出土遺物観察表	12	表-7 その他の遺物観察表	22
表-4 第3号住居跡出土遺物観察表	17		

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成19年7月5日、古河市教育委員会に株式会社ブリリアントフューチャーより文化財保護法第93条に基づいて古河市大山字上耕地1758-1に係る埋蔵文化財発掘の届出及び試掘調査依頼が提出された。開発予定地は平成16年に前所有者が実施した投棄物撤去の際に、古河市教育委員会が立ち会って竪穴住居跡が残存していることを確認していたことから、平成19年7月9日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。

また、7月18日に試掘調査を実施し、古河市教育委員会と株式会社ブリリアントフューチャーは遺跡の取扱いについて協議を開始したが、倉庫の建設位置を南側に移動する予定があることを受けて8月23日、24日にさらに範囲を広げて試掘調査を実施し、4軒の竪穴住居跡を確認した。これらの試掘調査の結果を受けて遺跡の取扱いについて再度協議を行った。協議において、建物基礎構造工事の計画変更は困難なため、工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

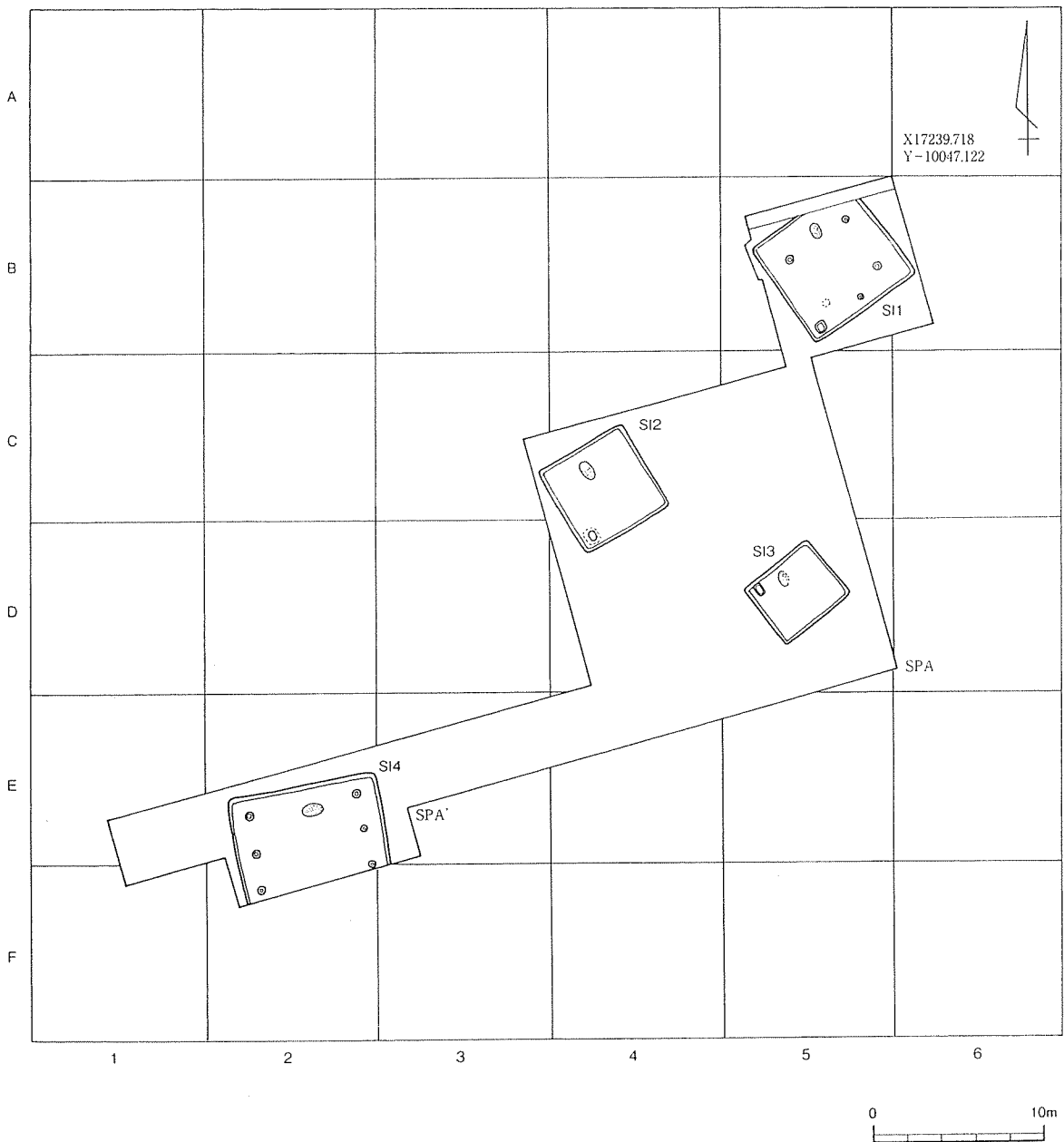
古河市教育委員会と株式会社ブリリアントフューチャーは、発掘調査の実施に向けて具体的内容の調整を図り、調査に際して「埋蔵文化財に関する協定書」を取り交わして調査を有限会社原史文化研究所に委託することとした。有限会社原史文化研究所は平成19年9月12日付けで茨城県教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財発掘調査の届出」を提出し、古河市教育委員会の指導のもと、平成19年10月17日から発掘調査を実施することとなった（第1図）。



第1図 調査区の位置（アミ掛け部分）

第2節 調査経過

本遺跡の調査は発掘調査が10月17日より11月2日まで行われ、引き続き整理作業に入った。10月17日、バックホウ（0.4）により表土の除去を開始。翌日から遺構検出作業を進め、4軒の住居址を確認した。19日には調査区西側の住居跡から発掘を開始する。いずれの住居跡も木の根・ごみ穴等による攪乱を受けていたが、比較的遺存状態はよい。10月31日には各住居跡の調査を終了し、調査区南壁の土層断面実測、ナイフ形石器が出土した第4号住居跡東脇の掘り下げを行ったが、旧石器時代の遺物は認められなかった。11月2日、埋め戻しを含め全ての作業を完了する。11月5日より整理作業に入り、水洗い、注記、実測、トレース、写真撮影を行い、図版作成等を進める。平成20年1月31日、ここに報告書を上梓する運びとなった（第2図）。



第2図 遺構全体図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上耕地遺跡は、茨城県古河市大山字上耕地1759-1ほかに所在している。上耕地遺跡が所在する大山は古河市西部にあたる古河地区（旧古河市）の南部に位置する（第3図）。

古河市西部の地形は、西端を南北に貫流する渡良瀬川と東部域を南北に貫流する向堀川や女沼川・宮戸川の支流に沿って形成された狭小な沖積低地と、猿島台地の洪積地とから成っている。猿島台地は、鬼怒川支流の田川と渡良瀬川支流の思川・姿川に挟まれた宇都宮市から五霞町にいたる台地（宝木段丘面）の南部に位置し、思川と西仁連川の間であって北西から南東方向へ延びる標高約20m前後の台地である。また、台地の南側は、利根川や江戸川を隔てて下総台地に接している。古河地区の当台地は、渡良瀬川と向堀川によって浸食されて樹枝状の小支谷を形成している。地質的には下部から成田層・竜ヶ崎砂礫層・常総粘土層を基盤層として、上部に褐色の関東ローム層が堆積し、最上部は腐食土層となっている¹⁾。

当遺跡は、旧大山沼（向堀川）西側の台地緩斜面上に立地し、標高は14～15mである。台地は主に宅地・畑地・平地林として利用されている。

第2節 歴史的環境

上耕地遺跡は縄文時代及び古墳時代を中心とする複合遺跡である。当遺跡の周辺の地形は変化に富み、旧石器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く分布しているが、現在までのところ発掘調査事例は極めて少ない。

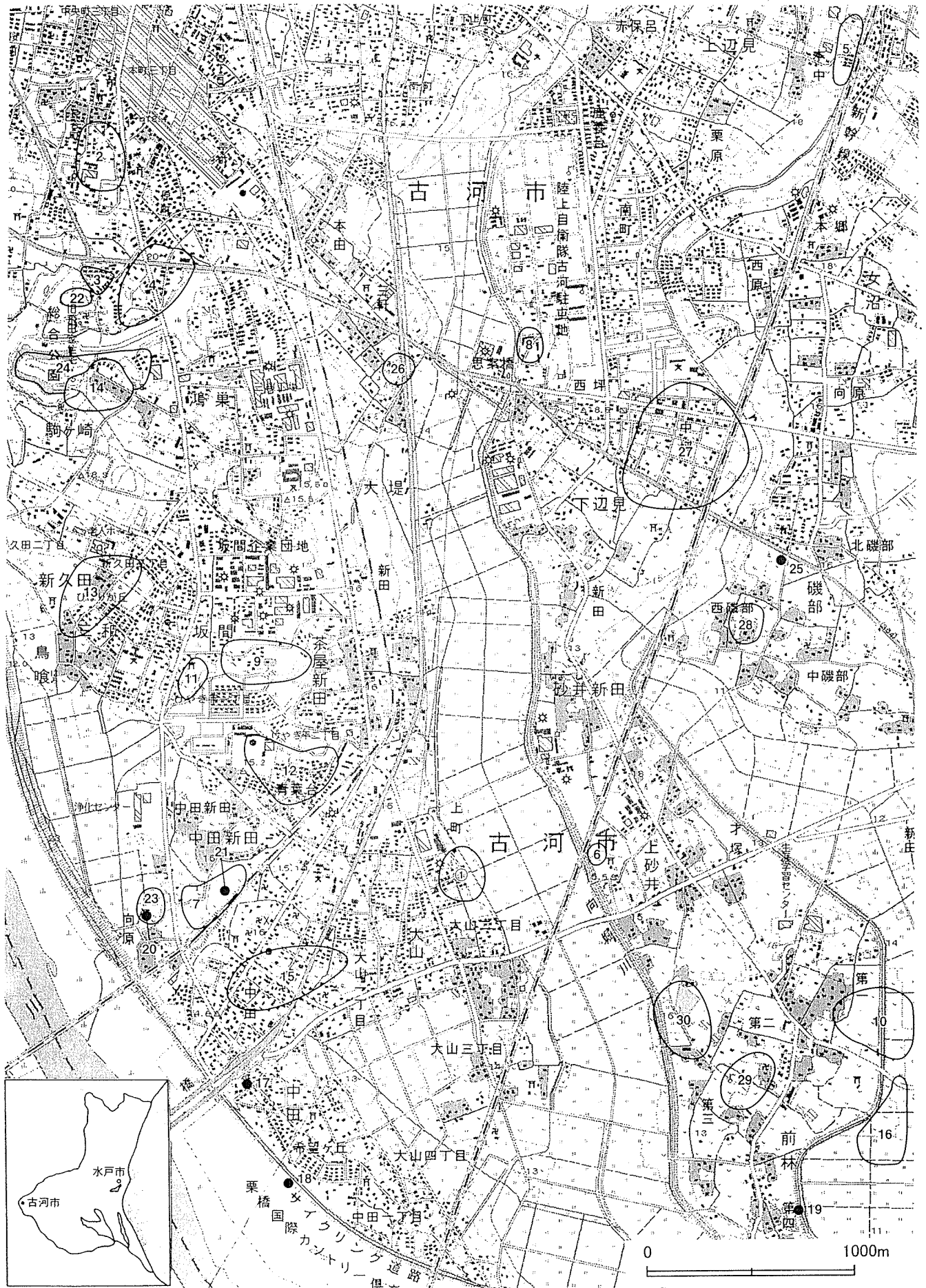
旧石器時代の遺跡としては、分布調査時にナイフ形石器が採集された長谷遺跡〈2〉、元屋敷遺跡〈3〉、尖頭器が採集された虚空蔵東遺跡〈4〉がある²⁾。これらは、渡良瀬川から東に派生する鴻巣の谷と呼ばれる小支谷の周辺に分布している。また、向堀川の東側では旧积水沼に流れ込む女沼川沿いに分布する鹿養大道遺跡〈5〉で尖頭器、東原遺跡〈6〉でナイフ形石器が採集されている³⁾。

縄文時代の遺跡には、原町西貝塚として古河市史編纂事業に伴って発掘調査された元屋敷遺跡が鴻巣の谷北側台地にあり、縄文時代前期の竪穴住居跡5軒を確認している⁴⁾。同じく、利根川と渡良瀬川の合流点左岸の中田新田遺跡〈7〉も古河市史編纂事業に伴って調査されており、縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡2軒が確認され、土製耳飾り・石棒等の祭祀具が出土している²⁾。また、向堀川左岸の思案橋遺跡〈8〉でも縄文時代後期から晩期の竪穴住居跡5軒が確認され、ミミズク形土偶・土製耳飾り・石棒等の祭祀具が出土している⁵⁾。

弥生時代の遺跡は、極めて少ない。坂間遺跡〈9〉で弥生時代終末期の土器片が採集されているほか²⁾、日下部遺跡〈10〉の発掘調査時に遺構外遺物として、弥生時代後期の土器片が確認されている⁶⁾。

古墳時代になると、遺跡数は増加する。渡良瀬川左岸の小支谷や利根川左岸の大山沼、釈迦沼などに面した台地縁辺部に多く位置しており、長谷遺跡、南谷遺跡〈11〉からは古墳時代前期の器台、壺が出土している。また、出土している土器から新帳神明遺跡〈12〉、中田新田遺跡は前期から中期にわたる集落跡、鳥喰遺跡〈13〉は中期から後期にわたる集落跡、城地遺跡〈14〉、坂間遺跡、小山遺跡〈15〉は前期から後期にわたる集落跡と考えられている²⁾。

旧釈迦沼右岸の羽黒遺跡〈16〉は、旧総和町教育委員会及び茨城県教育財団によって発掘調査が行われている。茨城県教育財団による平成12年から13年の調査では、前期の竪穴住居跡14軒、前期～中期の竪穴住居跡4



第3図 遺跡の位置①と周辺遺跡分布図

表-1 上耕地遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中近世
①	上耕地遺跡		○		○			16	羽黒遺跡		○		○	○	○
2	長谷遺跡	○	○		○	○		17	高台古墳(1号)				○		
3	元屋敷遺跡		○		○			18	高台古墳(2号)				○		
4	虚空蔵東遺跡	○	○	○	○			19	台古墳群				○		
5	鹿養大道遺跡	○	○		○			20	向原古墳				○		
6	東原遺跡	○						21	駒塚古墳				○		
7	中田新田遺跡		○		○			22	徳源院遺跡		○		○	○	○
8	思案橋遺跡		○		○			23	向原遺跡		○	○	○	○	
9	坂間遺跡		○	○	○			24	古河公方足利成氏館跡				○		○
10	日下部遺跡	○	○	○	○	○	○	25	磯部館跡						○
11	南谷遺跡		○	○	○	○		26	鮭延寺遺跡		○		○	○	○
12	新帳神明遺跡		○		○			27	東畑遺跡		○		○	○	
13	鳥喰遺跡		○		○	○		28	勝願寺遺跡				○	○	
14	城地遺跡		○		○	○	○	29	大道北遺跡				○	○	
15	小山遺跡		○		○	○		30	磯ノ井遺跡		○		○	○	

軒，中期の竪穴住居跡2軒，後期の竪穴住居跡2軒が確認されており，前期の竪穴住居跡から「竈に付随しない土製支脚」が出土していることが特筆される⁷⁾。

利根川左岸には，男子埴輪を出土した高台古墳(2号)〈18〉²⁾，金銅装大刀・鉄製壺鍔を出土した台古墳群〈19〉³⁾など多くの古墳があったと考えられるが，利根川の改修工事や干拓事業，圃場整備事業によって湮滅し，現在は向原古墳〈20〉，駒塚古墳〈21〉，高台古墳(1号)〈17〉にわずかな墳丘が残るだけである。

奈良・平安時代の当地域は，下総国の北西端に位置し，北には下野国，東に常陸国，北西に上野国，南西に武蔵国が存在していた。奈良・平安時代の遺跡は，比較的大きな谷津や沼に面した台地上に多く分布している傾向がある。渡良瀬川左岸の長谷遺跡，徳源院遺跡〈22〉では須恵器杯，向原遺跡〈23〉では須恵器蓋，小山遺跡では土師器の杯と甕が出土している²⁾。また，旧釈迦沼沿いでは旧総和町教育委員会が発掘調査を行った日下部遺跡で，平安時代と考えられる竪穴住居跡1軒⁶⁾，茨城県教育財団が発掘調査を行った羽黒遺跡で，奈良時代の竪穴住居跡11軒と平安時代の竪穴住居跡27軒が確認されている^{7)，8)}。

古代・中世において利根川の流路は東京湾に注ぐ旧利根川水系と旧総和町域付近を水源とする常陸川水系に分かれており，利根川水系は南北，常陸川水系は東西の河川交通における幹線であったと考えられている。そ

して、両水系を陸路で結ぶ位置にある当遺跡を含んだ下総国北西部地域が水陸交通の要衝であったことは、享徳4年（1455年）、足利成氏が当地古河に移座した理由の一つでもあろう。

中世以降で確認されている遺跡の大部分は、城館跡または縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡である。渡良瀬川左岸には、古河公方足利成氏館跡〈24〉、古河城跡、旧釈迦沼、水海沼の周囲には、古河公方の重臣である梁田氏が築いたとされる磯部館跡〈25〉、水海城跡などの城館がある（第3図参照）。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第3図及び表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 村上慈朗 「総和町および周辺地域における河川の変遷について」『そうわ町史研究』第5号 総和町教育委員会生涯学習課町史編さん係 1999年10月
- 2) 古河市史編さん委員会『古河市史 資料 原始・古代編』古河市 1986年3月
- 3) 総和町史編さん委員会『総和町史 資料編 原始・古代・中世』総和町 2002年3月
- 4) 古河市史編さん委員会原始古代部会「原町西貝塚発掘調査報告書」『古河市史資料』第9集 古河市 1985年3月
- 5) 総和町教育委員会『茨城県総和町思案橋遺跡』総和町 1987年6月
- 6) 五十嵐隆・藤田実・村上慈朗 『羽黒・日下部遺跡発掘調査報告書』総和町 1999年2月
- 7) 駒澤悦郎 「羽黒遺跡 一級河川女沼川河川改修工事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第202集 茨城県教育財団 2003年3月
- 8) 石川義信 「羽黒遺跡2 一級河川女沼川河川改修工事業地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第262集 茨城県教育財団 2006年3月

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地名表編）』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図（地図編）』茨城県教育委員会 2001年3月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

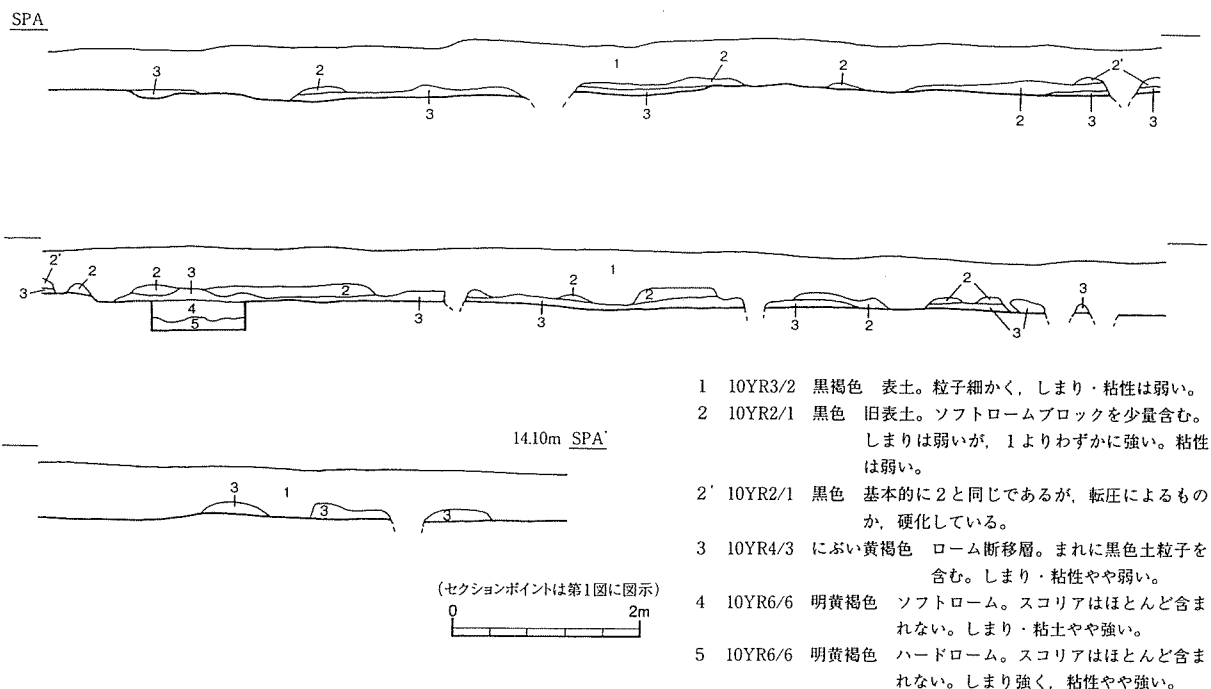
上耕地遺跡は、向堀川右岸の標高14m前後の台地上に位置する縄文時代及び古墳時代の複合遺跡である。現況は宅地、工場敷地、畑地及び雑種地であり、調査面積は650㎡である。

今回の調査によって、古墳時代の竪穴住居跡4軒を確認した。

遺物は、遺物収納箱(54×34×15cm)に5箱出土している。遺構外から旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の遺物は、前期・後期土器が出土している。古墳時代の出土遺物は土師器(壺・甕・高杯・甌・埴型土器)、石製品(砥石)などである。

第2節 基本層序

本調査区は標高13.80m~13.90m程を測り、向堀川の流れる旧大山沼に向かってやや傾斜をみせている。粘性の弱い黒色土である表土は平均して50cmの厚さであり、所々に漸移層を残しているが、殆どローム層上まで達している。すなわち、耕作による結果と考えられ、10cm前後残存している漸移層は本来的に更なる厚さがあったとみられる。その下位のローム層面は標高にして13.50m~13.60m程であり、表土同様に平坦となっている。上層20cmはソフトロームとなり、下位はハードロームとなっている。このハードローム層を含めてローム層にはスコリアは殆どみることができなかった。(第4図)



第4図 基本層序

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構と遺物について、以下報告する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第5～8図・PL 3, 7・表-2）

位置 調査区の北東端に位置する。住居跡の北東隅は地境に接し、軟弱な壁のため崩落の危険性があり、一部検出できなかった。

規模と形状 長軸7.18m、短軸7.1m程の方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は25cm程で、やや外傾して立ち上がっている。

床 貼床で、中央部を中心にやや堅緻となっている。壁下から粘土塊（0.03m³）と炭化材が検出されている。

炉 長径95cm、短径70cmの不整楕円形で、北辺寄りに付設されている。皿状に10cm程掘り込まれ、底面は被熱し、赤化している。

ピット 4か所。P1～P3は深さ20～30cmで、規模と配置から主柱穴、南辺寄り中央にあるP4は深さ28cmで、梯子穴である。南西部に想定される主柱穴は、攪乱によって壊されていると考えられる。

貯蔵穴 P5。長径82cm、短径72cmの隅丸長方形で、深さは45cmを測る。南西隅に位置している。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

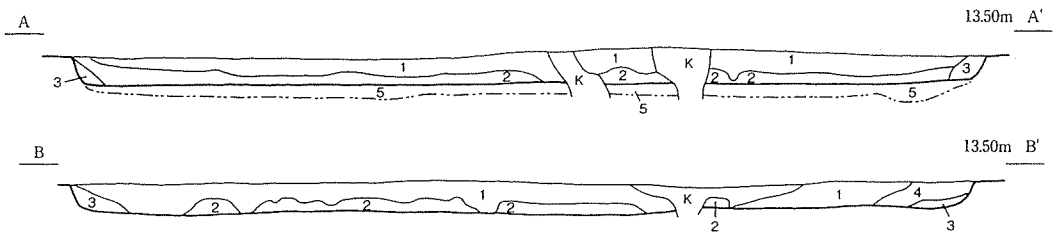
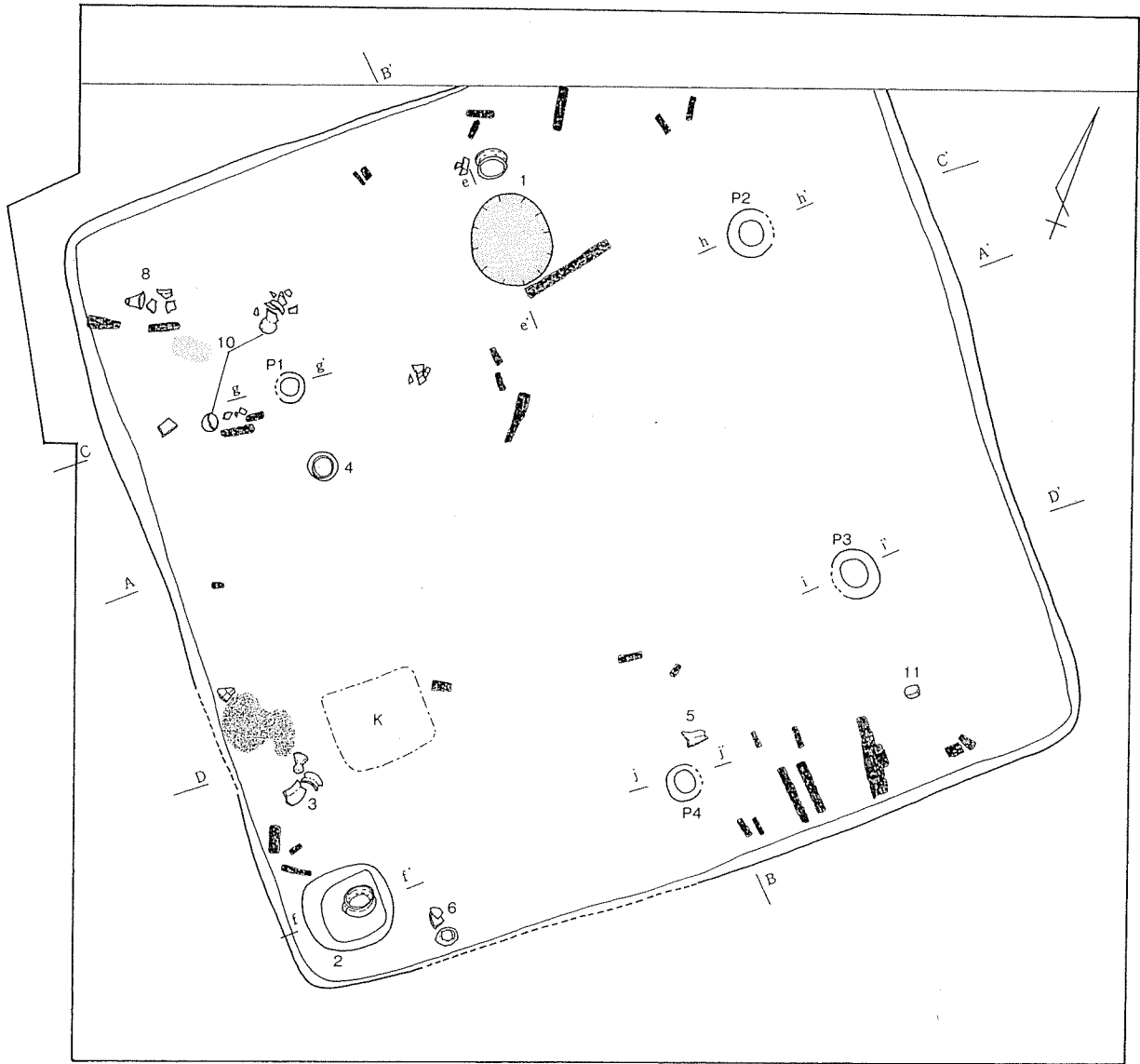
覆土 4層に分層される。人為的な堆積状況を示しているが、1層は自然堆積である。

遺物出土状況 土師器（甕、壺、高杯、埴形土器）、石製品（磨石）が出土している。これらは、北辺から西辺壁下付近の床面上から流れ込みの状況で出土しており、本跡の廃絶直後に投棄されたと考えられる。

所見 覆土中や床面から部分的に炭化材が検出されている状況は、本住居を焼却した可能性を示している。時期は、出土土器から前期（4世紀後半）と考えられる。

表-2 第1号住居跡出土遺物観察表

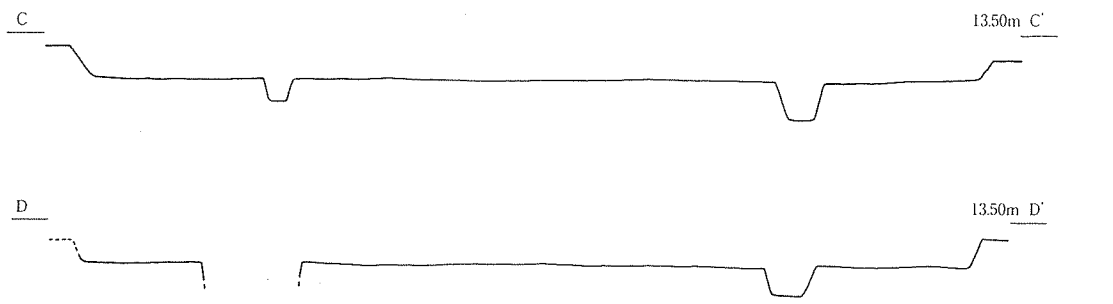
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	16.7	(17.0)	-	長石・石英	内外面とも 橙褐色	堅緻	口縁部横ナデ、体部内外面ヘラナデ	北壁下床面	50%
2	土師器	壺	16.8	(6.2)	-	長石・石英	外面薄褐色 内面暗褐色	堅緻	口唇部横ナデ、内外面ハケ目	貯蔵穴内	20%
3	土師器	壺	18.2	(5.3)	-	長石・石英	内外面暗褐色	堅緻	口縁部横ナデ、内外面ヘラ磨き	西壁下床面	20%
4	土師器	壺	13.6	(5.3)	-	長石・石英	内外面薄橙 褐色	堅緻	口縁部横ナデ、内外面ハケ目	北東隅床面	20%
5	土師器	甕	[18]	(6.0)	-	長石・石英	内外面暗褐色	堅緻	口辺部横ナデ、体部内外面ヘラナデ	南壁下床面	20%
6	土師器	甕	-	(11.6)	7.1	長石・石英	外面暗褐色 内面褐色	堅緻	体部外面ハケ目ヘラナデ、体部内面ヘラナデ	南西隅床面	50%
7	土師器	甕	-	(11.5)	-	長石・石英	内外面暗褐色	堅緻	体部外面ヘラ削り、体部内面ヘラナデ	北西側床面	30%
8	土師器	高杯脚	-	(9.1)	[16]	長石・石英	内外面薄褐色	堅緻	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	北西隅床面	50%
9	土師器	埴	10.1	10.4	3.2	長石・石英	内外面薄褐色	堅緻	口辺部横ナデ・ヘラナデ、体部外面ヘラナデ・ヘラ削り、内面ヘラナデ	西壁下床面	100%
10	土師器	埴	13.9	15.4	3.5	長石・石英	内外面暗褐色	堅緻	口辺部・体部ヘラ磨き	北西隅床面	60%
12	土製品	-	-	-	-	長石・石英	褐色	堅緻	長さ11.3cm、重量103g	西壁下	-
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
11	磨石	10.9	6.7	4.8	629g	砂岩	断面長方形		南東隅	-	



- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒、少量のロームブロック、わずかな木炭粒を含む。しまりあまり強くなく、粘性は弱い。
- 2 10YR4/4 褐色 多くのローム粒・ロームブロック、わずかな木炭粒・焼土粒を含む。しまりやや強く、粘性やや強い。
- 3 10YR5/6 黄褐色 2に似るが、ロームブロックの量が多い。しまりやや強く、粘性はあまり強くない。
- 4 10YR3/2 黒褐色 比較的多くのローム粒、ごくわずかなロームブロックを含み、比較的多くの木炭粒、わずかな焼土粒を含む。
しまり強く、粘性はあまり強くない。
- 5 10YR6/6 明黄褐色 掘り方埋土。ソフトロームブロック主体で、多くの黒色土ブロック、わずかなハードロームブロックを含む。
しまり強く、粘性やや強い。

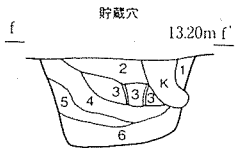


第5図 第1号住居跡実測図(1)

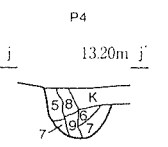
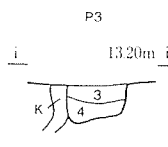
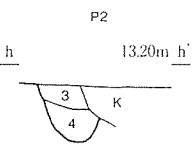
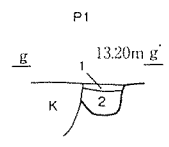


e 13.20m e'

1 5YR5/8 明赤褐色 やや多くの焼土粒と少量の焼土ブロック（径1~3cm）を含む。しまり・粘性やや強い。



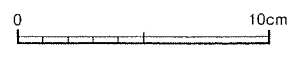
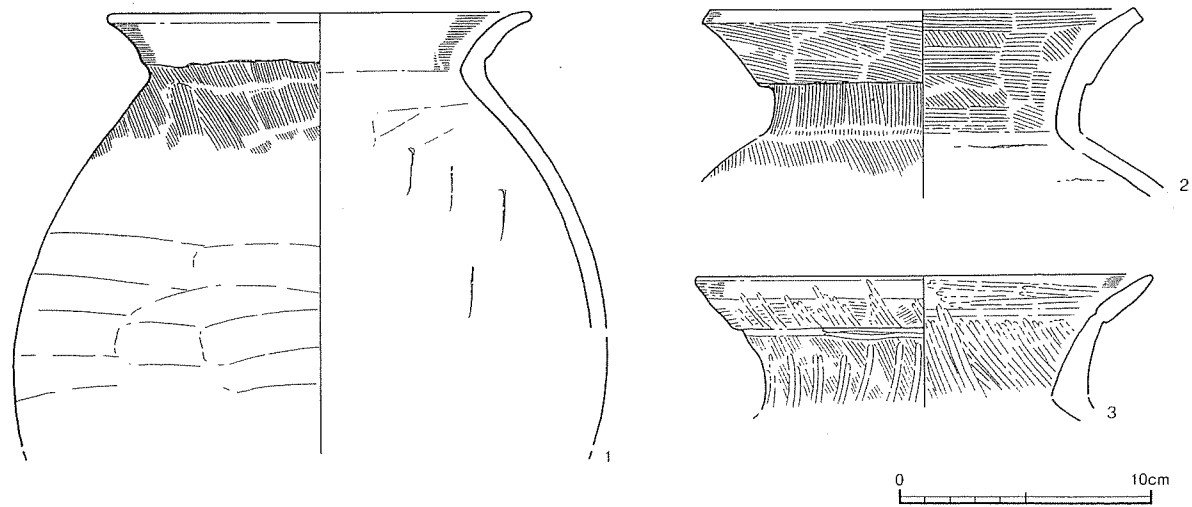
- 1 ロームブロック
- 2 10YR3/1 黒褐色 多量のロームブロックとわずかなローム粒を含む。
- 3 10YR3/2 黒褐色 わずかなローム粒・ロームブロックを含む。
- 4 10YR3/1 黒褐色 少量のローム粒を含む。
- 5 10YR5/6 黄褐色 ローム粒をやや多く含み、ロームブロックを少量含む。
- 6 10YR6/8 ロームブロックを含み、褐色土をわずかに含む。硬化が認められる。



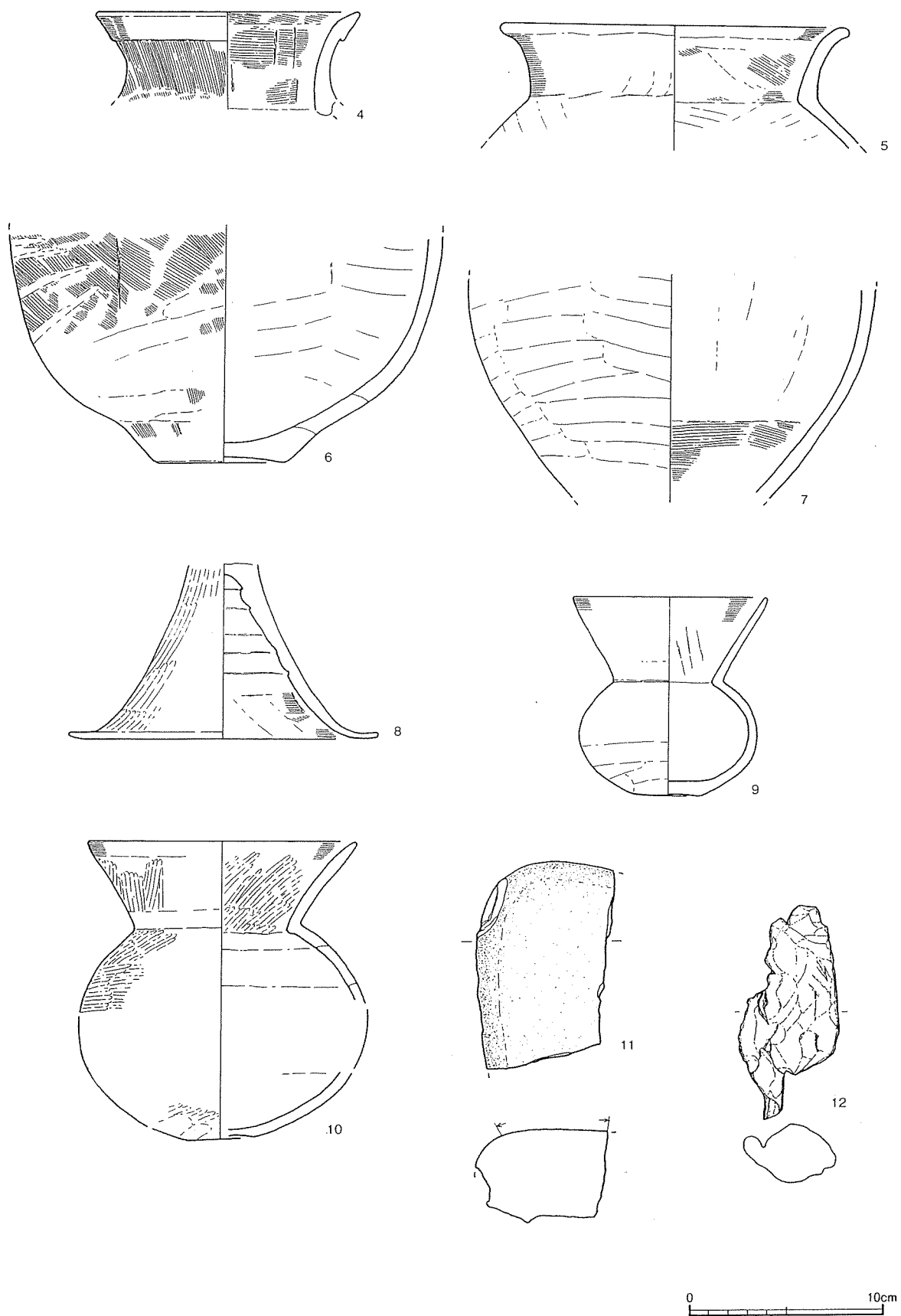
- 1 10YR3/4 暗褐色 やや多くのソフトローム、わずかなハードロームブロック（径1~2cm）を含む。
- 2 10YR5/6 黄褐色 多くのソフトローム、わずかなハードロームブロック（径1cm前後）を含む。軟質。
- 3 10YR3/2 黒褐色 ローム粒少量のハードロームブロック（径0.5cm）を含む。しまり弱い。
- 4 10YR3/3 暗褐色 多くのソフトローム、わずかなハードロームブロックを含む。しまりやや弱い。

- 4 10YR3/2 黒褐色 やや多くのローム粒、少量のハードロームブロック（径0.5cm前後）を含む。しまり強い。
- 5 10YR6/6 明黄褐色 ソフトロームを主体とし、わずかな黒褐色土を含む。
- 7 10YR4/3 におい黄褐色 やや多くのローム粒を含む。やや軟質。
- 8 10YR3/1 黒褐色 わずかなローム粒を含む。やや軟質。
- 9 10YR3/2 黒褐色 多くのソフトロームを含む。ややしまり弱い。

第6図 第1号住居跡実測図(2)



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第2号住居跡（第9・10図・PL 4, 8・表-3）

位置 調査区中央北西側に位置している。

規模と形状 長軸6.05m, 短軸5.8mを測る南北にやや長い長方形で, 主軸方向はN-28°-Wである。壁高は30cm程で, 外傾して立ち上がっている。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としている。炉周辺で一部堅緻な部分がみられたが, 殆ど硬化面は認められなかった。

炉 長径105cm, 短径74cmの不整な楕円形で, 北辺寄りに付設されている。深さ10cm程の地床炉であり, 底面は西側がよく被熱して赤化が著しい。

ピット 検出されなかった。

貯蔵穴 P1。長径70cm, 短径60cmの隅丸状の長方形を呈する。深さは50cm程で, 南西隅に位置している。底面はやや起伏があり, 壁はフラスコ状に内傾して立ち上がっている。覆土内から脚部を欠いた高杯が出土している。

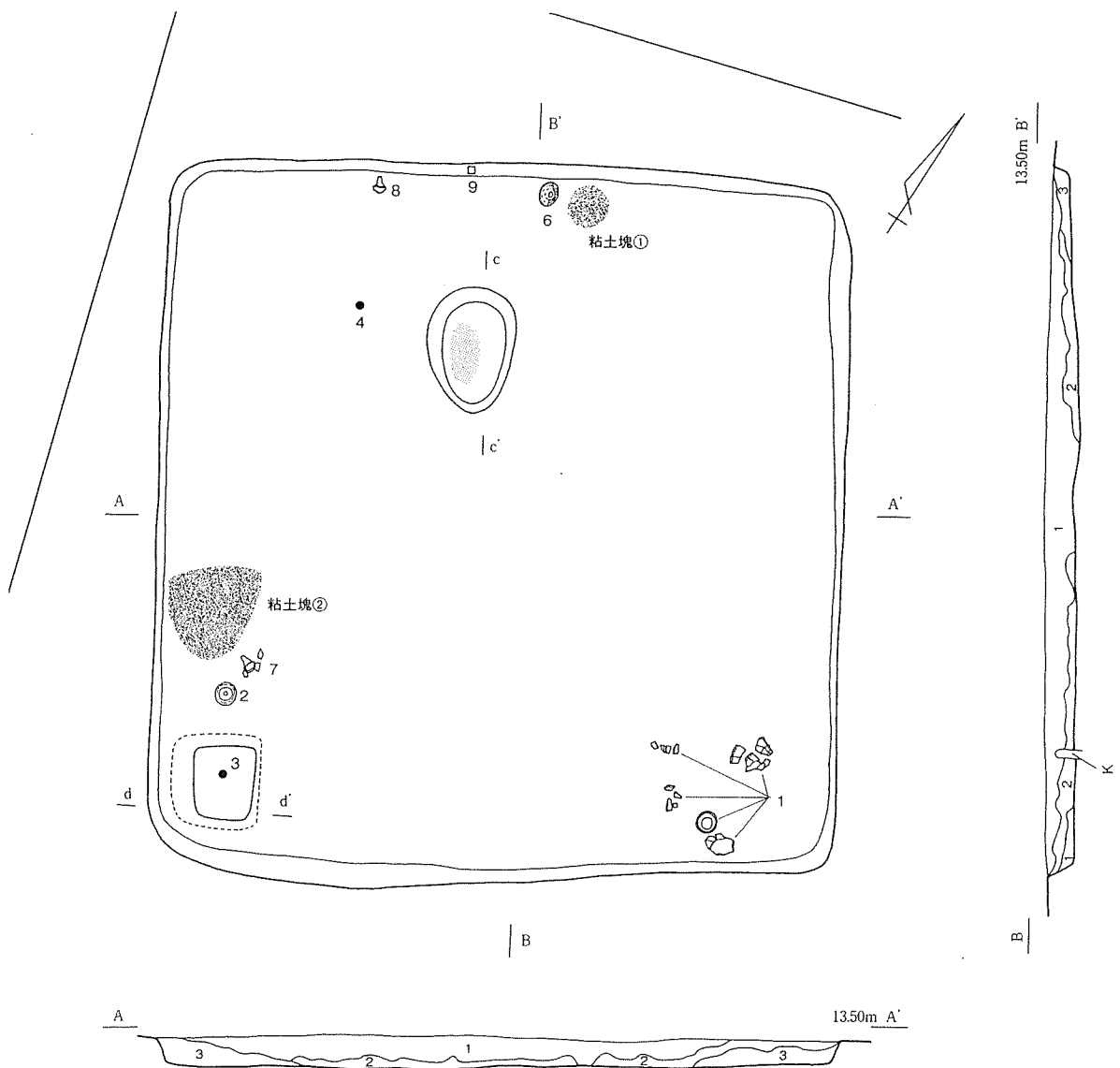
覆土 上層は粘性の弱い黒褐色土に覆われ, 3層に分層される。全体的に周囲から流れ込んだ様相を呈しており, 自然堆積である。

遺物出土状況 土師器（壺, 高杯形土器）, 石製品（砥石）, 粘土塊（①, 0.01m³, ②, 0.06m³）が出土している。いずれも, 床面近くから出土しているが, 粘土塊①は床面から1cm, ②は6cm程浮いていた。これらは本跡の廃絶後, 間もない時期に廃棄されたと考えられる。

所見 住居跡内に柱穴の検出がなく, 壁外周囲を精査したが, 柱穴は確認できなかった。北壁, 貯蔵穴周辺, 南東隅の壁際を中心に床面上から遺物が検出されている。とくに, 南東隅では3層と共に土器片が流れ込んだように拡がっており, 廃棄の状況が窺える。本跡の時期は, 出土土器から前期（4世紀後半）と考えられる。

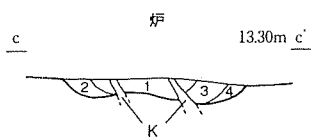
表-3 第2号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	15.4	32.8	[6.5]	長石・石英	内外面薄橙褐色	堅緻	口辺部ヘラ磨き, 体部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	南西隅床面	70%
2	土師器	高杯	19.0	(6.0)	-	長石・石英・雲母	外面暗褐色 内面橙褐色	普通	体部内外面ハケ目・ヘラ磨き	南西隅床面	50%
3	土師器	高杯	[19]	(5.7)	-	長石・石英・赤色粒子	内外面薄橙褐色	堅緻	体外面ハケ目, 内面ヘラ磨き	貯蔵穴内	30%
4	土師器	高杯	[17.6]	(6.2)	-	長石・石英	内外面薄橙褐色	堅緻	体部外面ハケ目, 内面ヘラ磨き	北西隅床面	20%
5	土師器	高杯	[18.6]	4.9	-	長石・石英	内外面黄褐色	普通	体部ハケ目, 内面ヘラナデ	覆土下層	20%
6	土師器	高杯脚	-	(11.2)	18.6	長石・石英・雲母	内外面赤褐色	普通	脚部内外面ハケ目・ヘラ磨き	北壁下床面	50%
7	土師器	高杯脚	-	(11.1)	[18.2]	長石・石英	内外面明赤褐色	普通	脚部外面ヘラ磨き, 内面ナデ・ハケ目	西壁下床面	40%
8	土師器	高杯脚	-	(8.3)		長石・石英	内外面橙褐色	堅緻	脚部外面ヘラ磨き, 内面ヘラナデ	北壁下床面	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
9	砥石	5.2	1.9	2.3	15g	軽石	断面は長方形, 砥面5面		北壁下		



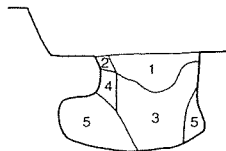
- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒, 2cm以下のロームブロックを含む。しまりやや強く, 粘性弱い。
- 2 10YR3/1 黒褐色 1cm前後のロームブロックを多く含む。しまり, 粘性やや強い。
- 3 10YR4/3 黒褐色 0.5~3cm大のロームブロックを少量含む。しまり, 粘性やや強い。

0 2m



- 1 10YR4/4 褐色 焼土ブロックを多く含む。
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 1cm以下のロームブロックを多く含む。しまり, 粘性弱い。
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 2に焼土粒が多く混入。しまり, 粘性やや弱い。
- 4 10YR4/4 褐色 焼土粒を多く含む。しまり, 粘性やや弱い。

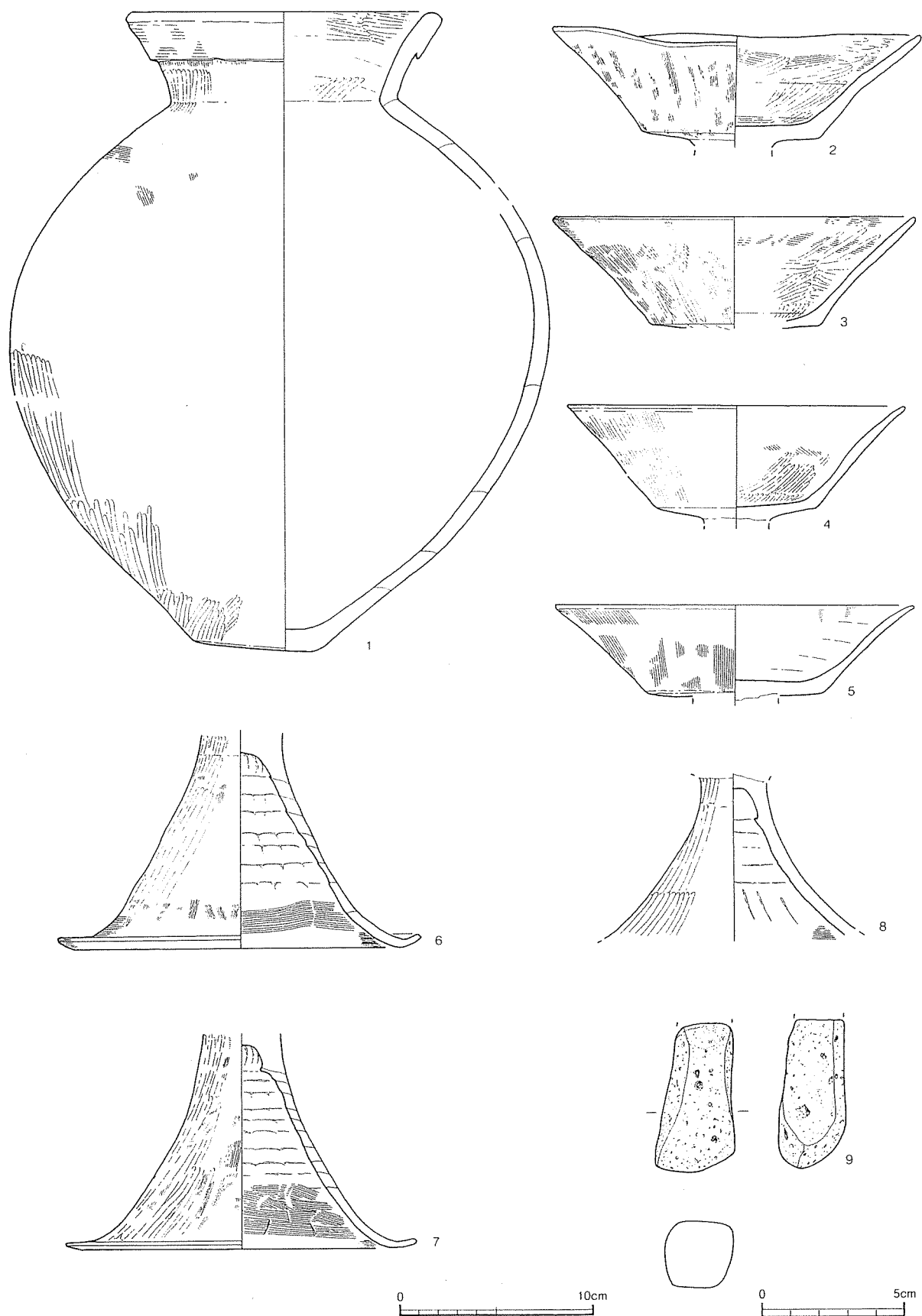
貯蔵穴 13.30m d'



- 1 10YR3/1 黒褐色 多くのローム粒と少量の炭化物を含む。しまり, 粘性やや強い。
- 2 10YR3/2 黒褐色 ローム粒を少量含む。しまり, 粘性やや強い。
- 3 10YR3/4 暗褐色 ロームブロックをやや多く含む。しまり, 粘性やや強い。
- 4 10YR3/4 暗褐色 3に似るが, しまり, 粘性3より強い。
- 5 10YR3/3 暗褐色 下部にロームブロックを少量含む。しまり強く, 粘性やや強い。

0 1m

第9図 第2号住居跡実測図



第10图 第2号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡 (第11, 12図・PL 5, 9-1・表-4)

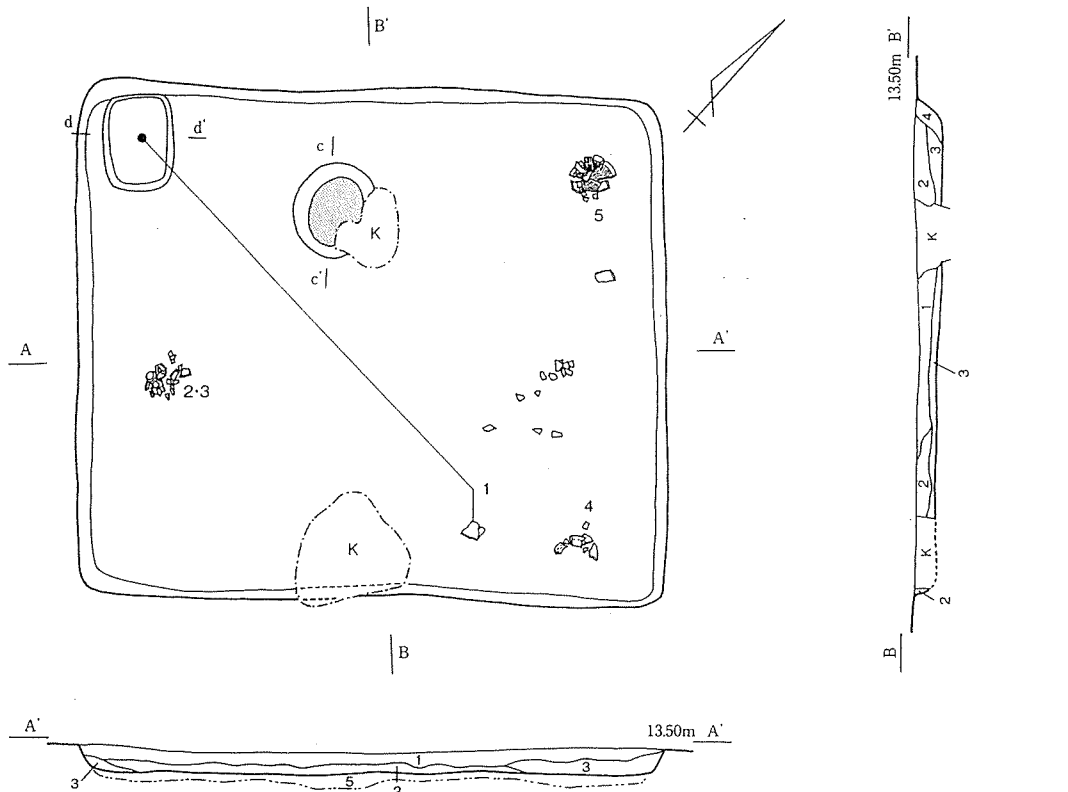
位置 調査区の中央南東側に位置している。

規模と形状 長軸4.65m, 短軸4.0mの長方形で, 主軸方向はN-32°-Wである。壁高は15~20cm程で, 外傾して立ち上がっている。

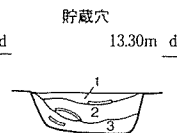
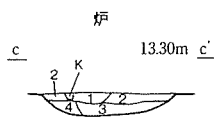
床 ロームブロックと黒色土を含んだ明黄褐色土で貼床されている。炉の周辺にかけての中央部が幾らか堅緻である。南辺が一部攪乱されている。

炉 北辺寄りに付設されている。長径75cmを測る不整楕円形とみられるが, 南東側は攪乱されている。方向は住居の主軸と一致している。床面を13cm程掘り窪めた地床炉で, 底面は被熱して赤化していた。

ピット 精査したが検出できなかった。



- 1 10YR3/2 黒褐色 ローム粒をわずかに含む。しまり, 粘性弱い。
- 2 10YR3/3 暗褐色 少量のロームブロック・ローム粒を含む。しまり, 粘性やや弱い。
- 3 10YR4/4 褐色 多くのローム粒, 少量の黒色土, ごくわずかな焼土粒を含む。しまり, 粘性やや弱い。
- 4 10YR4/6 褐色 ロームを主体とし, 少量の黒色土, ごくわずかな炭化物を含む。しまり, 粘性やや強い。
- 5 2.5Y6/8 明黄褐色 掘り方埋土。ロームブロック・ローム粒を主体とし, 黒色土ブロックを少量含む。しまり強く, 粘性やや強い。



- 1 10YR6/4 にぶい黄褐色 焼土ブロックを多く含む。しまり強い。
- 2 10YR5/6 黄褐色 多くの焼土粒と少量のローム粒を含む。しまり強い。
- 3 10YR5/6 黄褐色 多くの焼土粒と少量のローム粒を含む。しまり強い。
- 4 10YR4/6 褐色 焼土粒・ローム粒と少量の黒色土を含む。しまりやや弱い。

- 1 10YR5/6 黄褐色 多くの焼土粒とやや多くの黒色土を含む。
- 2 10YR5/6 黄褐色 多くのローム粒と少量の焼土粒を含む。
- 3 10YR6/6 明黄褐色 ローム粒を主体としハードロームブロックを含む。

0 2m

0 1m

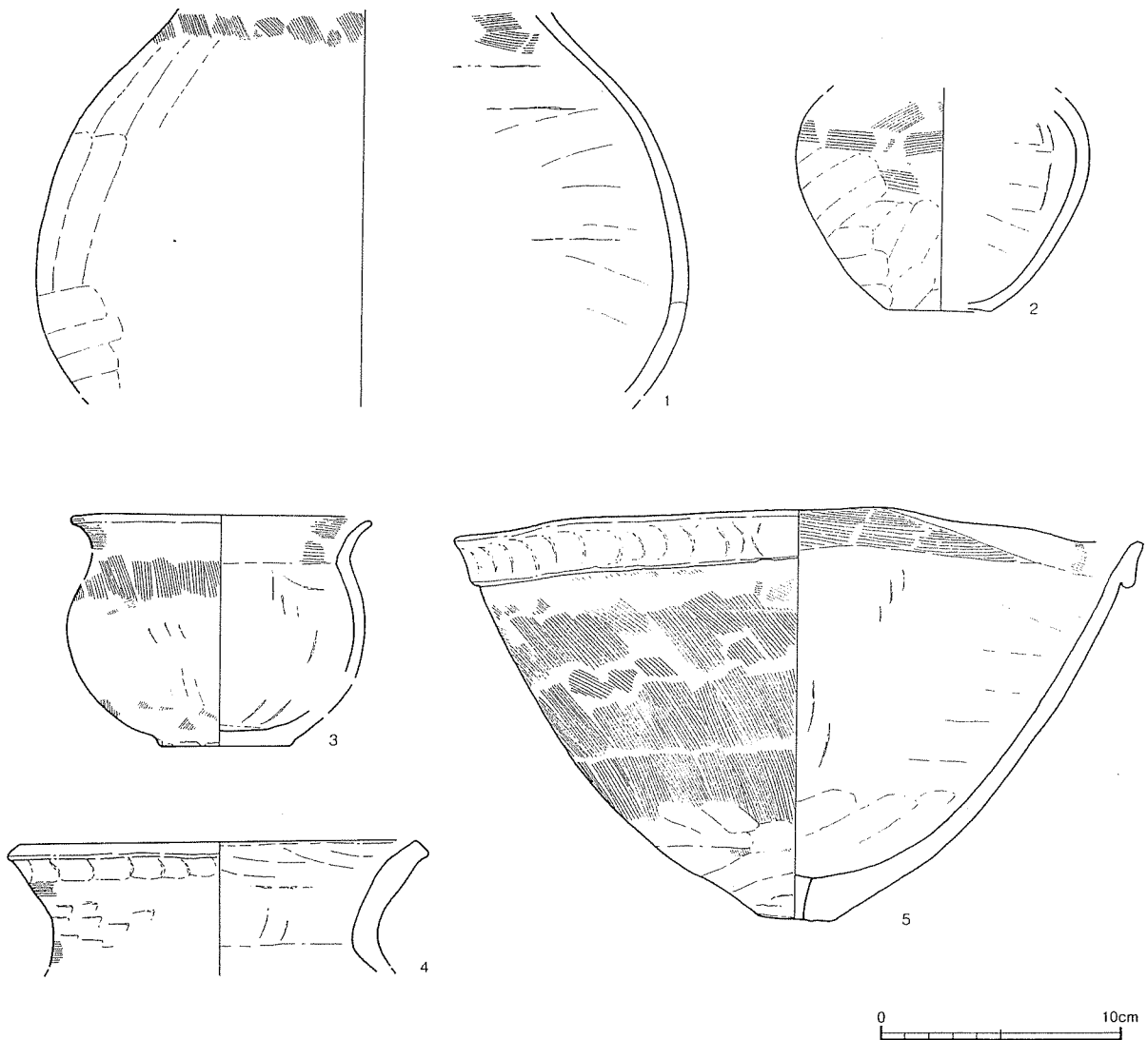
第11図 第3号住居跡実測図

貯蔵穴 P 1。北西隅に位置し、平面形は長径75cm、短径60cmを測る隅丸長方形である。深さは22cmで、立ち上がりはやや外傾している。中に甕形土器片(1)が検出されている。

覆土 4層に分層される。自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 土師器(甕、壺、甔形土器)が出土している。壁下周辺の床上から出土しているが、南東側では破片が流れ込んでいた。これら遺物は本跡廃絶後、間もなく廃棄されたと考えられる。

所見 本跡は検出した4軒中最も小型の住居であり、貯蔵穴の位置も異なっている。しかしながら、炉の位置など構造そのものは他の住居と大差ない。時期は出土の土器から前期(4世紀後半)と考えられる。



第12図 第3号住居跡出土遺物実測図

表一 4 第 3 号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	(15.1)	-	長石・石英	外面褐色 内面黄褐色	堅緻	体部内外面ヘラナデ・ハケ目	貯蔵穴内+東隅床面	50%
2	土師器	壺	-	(9.0)	4.2	長石・石英	内外面褐色	堅緻	体部外面ハケ目・ヘラナデ、内面ヘラナデ	西壁下床面	70%
3	土師器	甕	12.5	9.7	5.4	長石・石英	内外面褐色	堅緻	口辺部横ナデ、体部外面ハケ目・ヘラナデ、内面ヘラナデ	西壁下床面	80%
4	土師器	壺	16.4	(5.4)	-	長石・石英	内外面淡橙褐色	堅緻	口辺部横ナデ・押さえ、内面ヘラナデ	東隅床面	20%
5	土師器	甕	28.6 × 24.2	17.0	3.1 孔径 2.2	長石・石英	外面薄橙褐色、内面橙褐色	堅緻	口縁部押さえ、体部外面ハケ目・ヘラナデ、内面ヘラナデ	北隅床面	100% 焼成前穿孔 1

第 4 号住居跡 (第 13~16 図・PL 6, 9-2, 10-1・表-5)

位置 調査区の西端側に位置している。

規模と形状 平面形は長軸 8.60m, 検出部の短軸で 6.00m を測る方形ないしは長方形をなすとみられる。主軸方向は N-3°-E となっている。壁高は 25~30cm で、外傾して立ち上がっている。

床 地山のロームを平坦に掘り込み床面としており、やや軟弱となっている。中央部は有段住居という程明瞭ではないが窪んでいる (2 点破線内)。

炉 北辺寄りに付設されている。長径 110cm, 推定短径 90cm の楕円形である。床面を 13cm 程掘り窪めた地床炉であり、底面は被熱し赤化していた。

ピット 6ヶ所。P 1~P 6 は、深さ 12~22cm を測る。大きさから支柱穴とは考えられない。壁外周辺を精査したが、柱穴は確認できなかった。

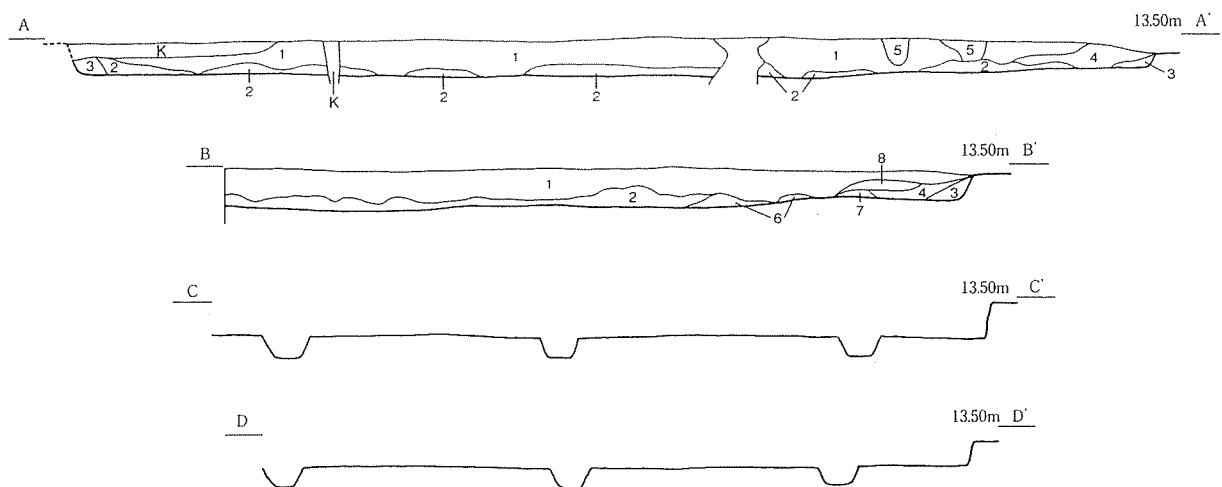
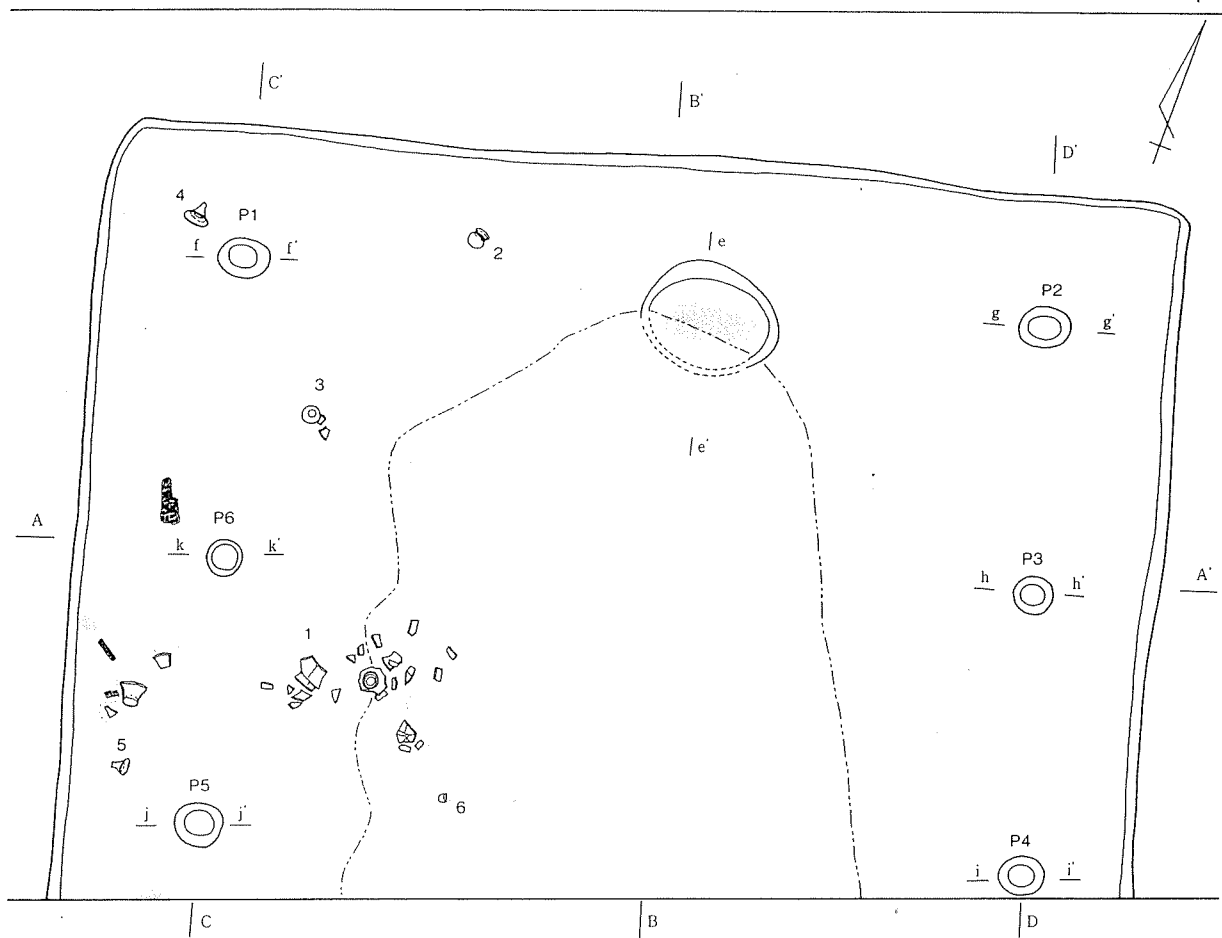
覆土 8 層に分層される。ブロック状に堆積している土層がみられることや、所により堆積の順序が逆転している土層がみられるため大半が人為堆積であるが、1 層は自然堆積であると考えられる。

遺物出土状況 土師器 (壺, 甕, 高杯形土器, 手捏土器) が、主に西壁側の覆土下層及び床面から出土している。遺物の量としては、比較的少量である。壺 (1) が西壁側の床面から、小型甕 (2) が北辺寄りの床面直上から、埴は P 6 の北側床面上から出土している。

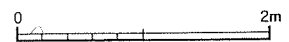
所見 西壁際の覆土中からは炭化材や幾らかの焼土が検出されているが、焼失住居とは考えられない。床面中央部の窪みは定型化した有段とはなっていないが、注視される。南半部分は調査区外となっているが、8m 台を測る大型の住居跡であり、集落構造を考えるのに興味深い。時期は、出土土器から前期 (4 世紀後半) と考えられる。

表一 5 第 4 号住居跡出土遺物観察表

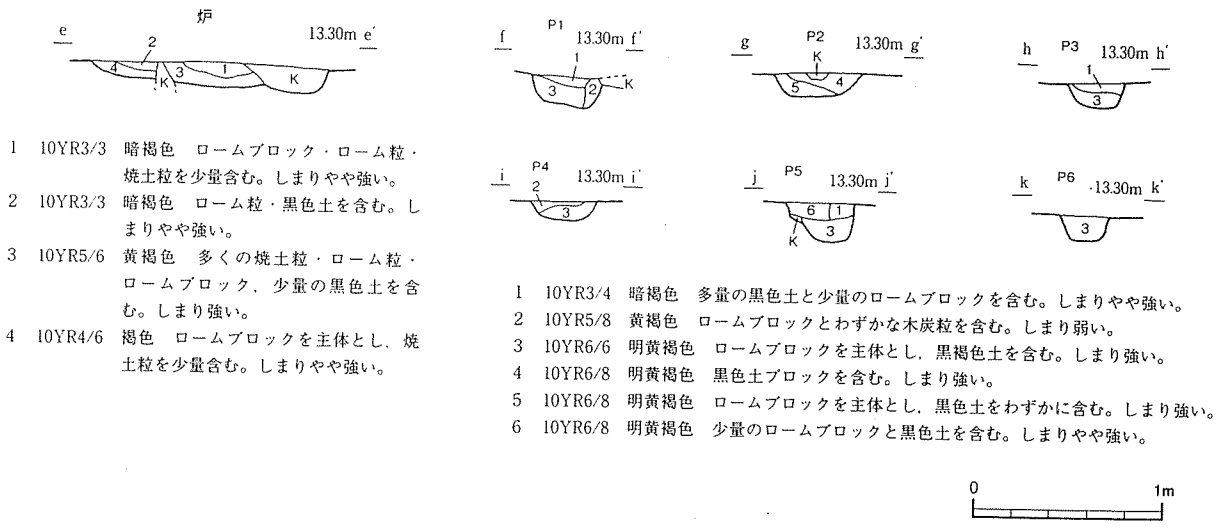
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	17.3	38.4	7.0	長石・石英	内外面橙褐色	堅緻	口縁部横ナデ、体部外面ヘラナデ・ヘラ削り、内面ヘラナデ	西壁下床面	80%
2	土師器	甕	12.5	8.8	-	長石・石英	内外面薄茶褐色	堅緻	口辺部ヘラ磨き、体部外面ヘラ磨き・ヘラ削り、内面ヘラ磨き	北壁下床面	100% 丸底
3	土師器	埴	11.0	9.4	3.5	長石・石英	内外面褐色	堅緻	口縁部横ナデ、口辺部ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り・ヘラナデ、内面ナデ	北西隅	90%
4	土師器	高杯脚	-	(10.4)	14.0	長石・石英	外面薄橙褐色、内面褐色	堅緻	脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ	北西隅部床面	50%
5	土師器	高杯脚	-	(9.3)	[15]	長石・石英	内外面濃橙褐色	堅緻	脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ	西壁下床面	40%
6	土師器	手捏土器	3.4	3.3	3.5	長石・石英	内外面褐色	堅緻		中央床面	100%



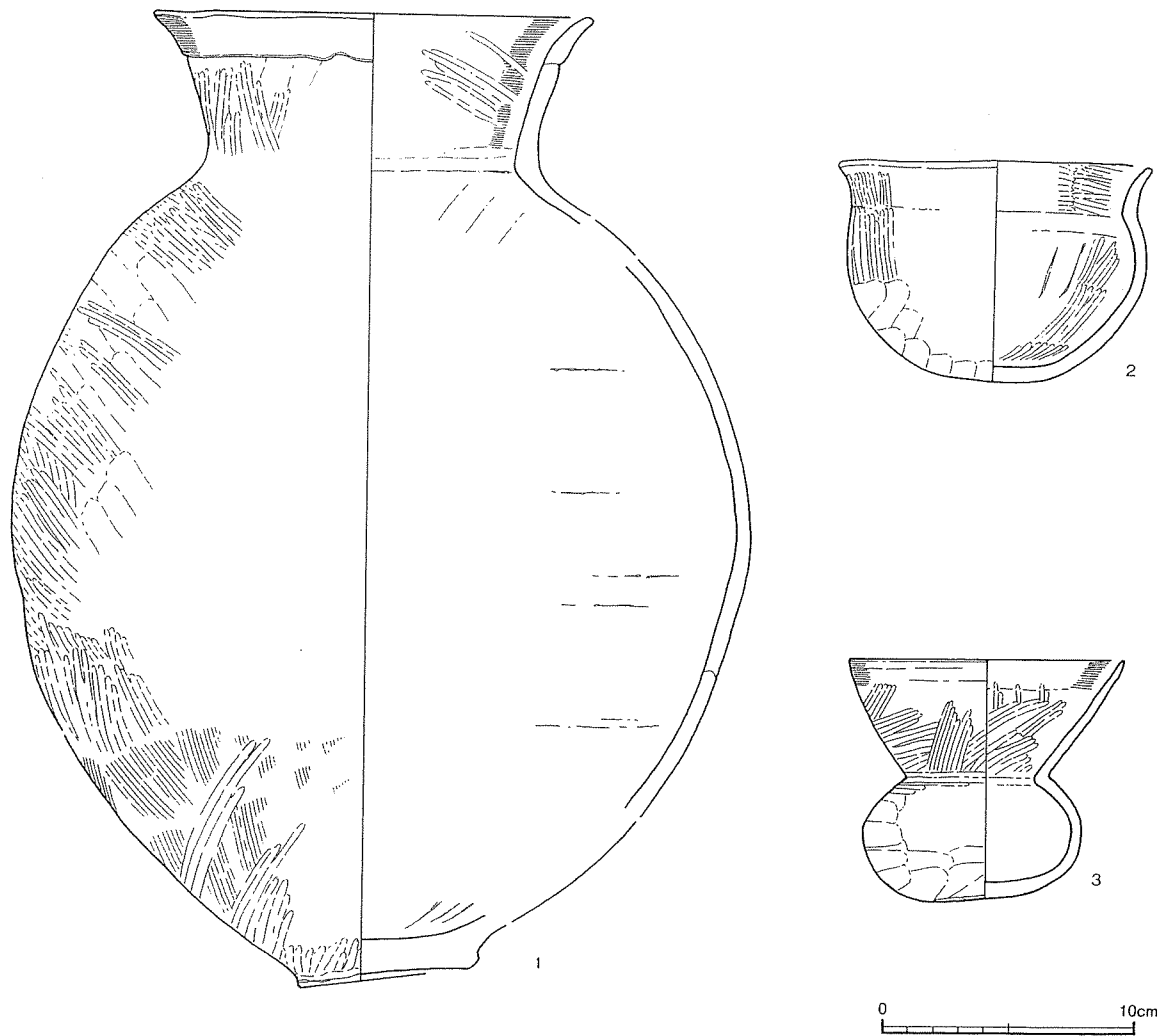
- 1 10YR2/2 黒褐色 ロームブロックを斑紋状に含み、木炭粒をわずかに含む。粒子細かい。しまり、粘性やや弱い。
- 2 10YR3/2 黒褐色 ロームブロックを比較的多く含む。木炭粒を含むが、西側で量を増す。しまり、粘性とも1よりわずかに強い。
- 3 10YR3/2 黒褐色 ローム粒を多く含む。壁ぎわに堆積しており、しまり、粘性は比較的強い。
- 4 10YR3/2 黒褐色 多くのローム粒と少量のロームブロック・ごくわずかな木炭粒・焼土粒を含む。しまり、粘性やや強い。
- 5 10YR2/1 黒色 ローム粒をわずかに含む。黒色味が強い。しまり、粘性やや弱い。
- 6 10YR3/2 黒褐色 多くの焼土粒と少量のローム粒を含む。しまり強い。
- 7 10YR3/2 黒褐色 多くの焼土粒とやや多くのローム粒を含む。しまり、粘性比較的強い。
- 8 10YR3/2 黒褐色 ローム粒・焼土粒をごくわずかに含む。しまり、粘性やや弱い。



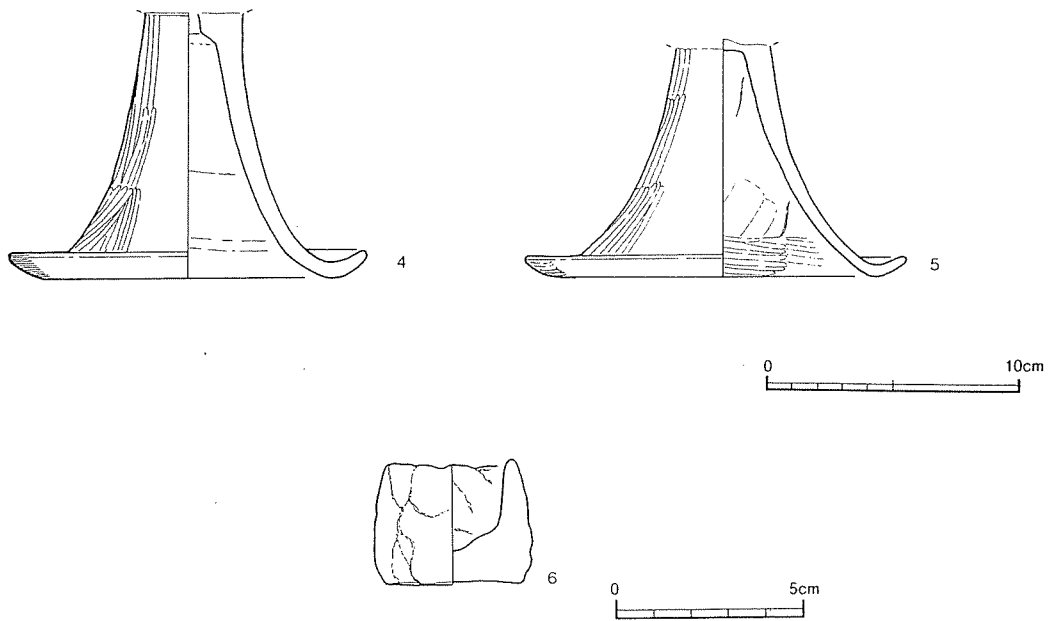
第13図 第4号住居跡実測図(1)



第14図 第4号住居跡実測図(2)



第15図 第4号住居跡出土遺物実測図(1)



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

表-6 古墳時代堅穴住居跡一覧表

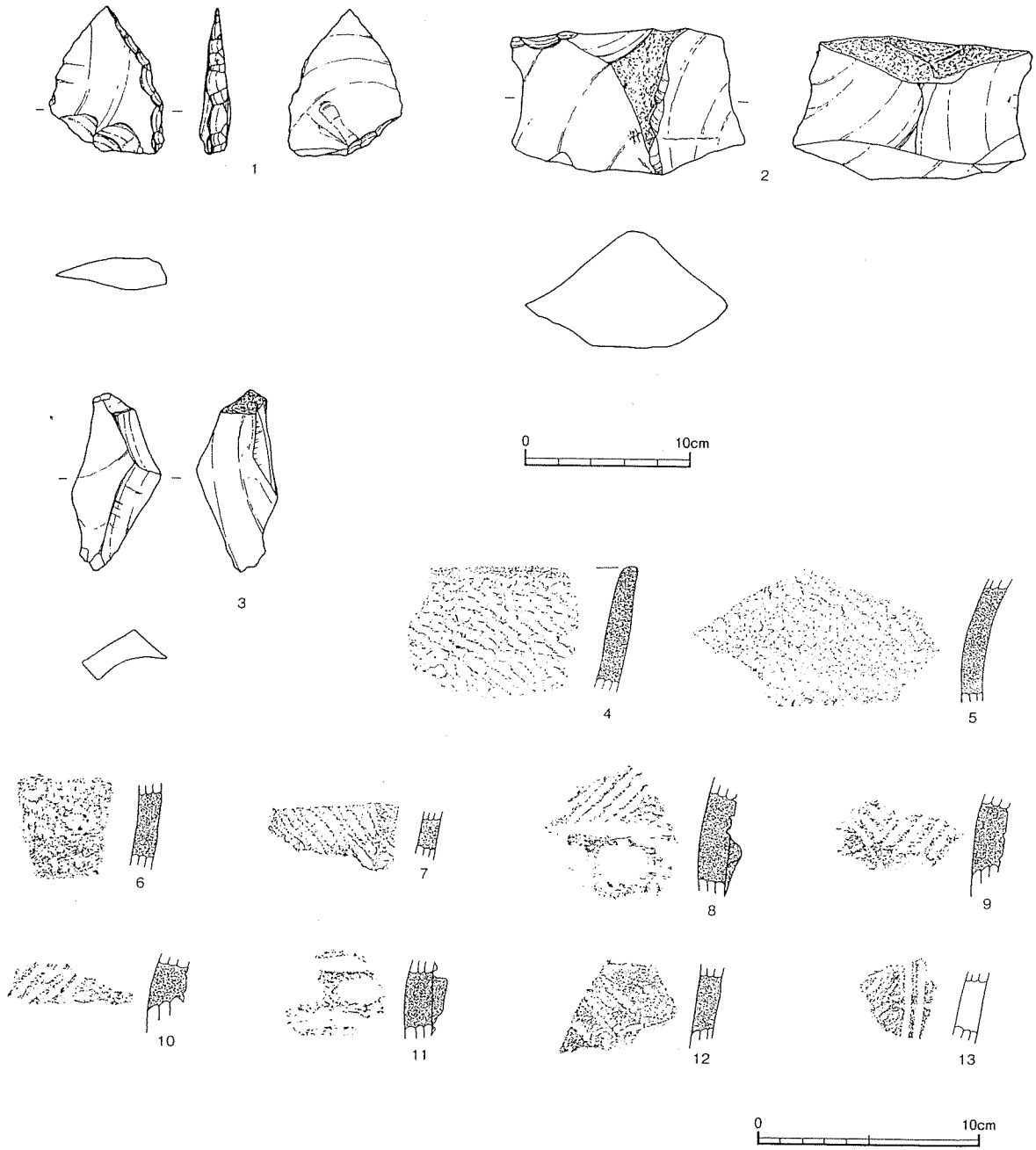
番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高(cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係 (旧→新)
								支柱穴	出入口 ピット	ピット	炉	貯蔵穴				
1	北東	N-30°-W	方形	7.18×7.1	20~30	貼床	—	3	1	—	地床炉	1	一部 人為	土師器・ 石製品	前期後半	単独
2	中央	N-28°-W	長方形	6.05×5.8	30	直床	—	—	—	—	地床炉	1	自然	土師器・ 石製品	前期後半	単独
3	中央	N-32°-W	長方形	4.65×4.0	15~20	貼床	—	—	—	—	地床炉	1	自然	土師器	前期後半	単独
4	西端	N-3°-E	[長方形]	8.60×[6.0]	25~30	直床	—	—	—	6	地床炉	—	一部 自然	土師器	前期後半	単独

2 その他の遺物 (第17図・PL10-2・表-7)

試掘, 表土除去, 遺構確認の段階で, 遺構に伴わない遺物, また古墳時代の住居覆土内から時期の異なる遺物が幾らか出土している。これらを本項でまとめた。

1は右側縁に刃潰しを加えたチャート製のナイフ形石器であり, 2・3はチャートの剥片である。また, 1の出土した第4号住居跡東側周辺を精査, ロームを掘り下げたが何らの遺物を得なかった。1は旧石器時代の石器である。4~7は胎土に繊維を含み, RL縄文原体末端などを施文する一群で, 関山式土器である。8~12はやはり胎土に繊維を含み, 半截竹管文などを施文する一群で, 黒浜式土器である。13は胎土に繊維を含まず, 縦位に半截竹管による並行沈線文を施文している。堀之内1式土器である。

このように, 散発的に縄文土器が検出されているが, 調査区内を精査したものの, 関連する遺構等は検出することはできなかった。



第17図 その他の遺物実測図

表一七 その他の遺物観察表

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
1	ナイフ形石器	2.2	1.7	0.5	2 g	チャート	側縁部に刃潰し	S I 4 外東側	
2	剥片	2.2	4.6	1.7	14 g	チャート	自然面あり	S I 4 覆土内	
3	剥片	2.6	1.3	0.7	1 g	チャート	自然面あり	S I 4 覆土内	

番号	種別	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様・手法の特徴	出土位置
4	縄文土器	-	(6)	-	繊維	褐色	普通	R L 縄文	表土
5	縄文土器	-	(6.4)	-	繊維	褐色	普通	R L 縄文	S I 2 覆土
6	縄文土器	-	(4.5)	-	繊維	褐色	普通	R L 縄文	S I 2 覆土
7	縄文土器	-	(2.5)	-	繊維・長石・石英	褐色	普通	R L 縄文	S I 1 覆土
8	縄文土器	-	(8)	-	繊維・長石・石英	褐色	普通	押圧文	表土
9	縄文土器	-	(4.9)	-	繊維・長石・石英	暗褐色	普通	押圧文	S I 2 覆土
10	縄文土器	-	(3.8)	-	繊維・長石・石英	橙褐色	普通	半截竹管文	S I 2 覆土
11	縄文土器	-	(4.4)	-	繊維・長石・石英	橙褐色	普通	半截竹管文・R L 縄文	S I 3 覆土
12	縄文土器	-	(4)	-	繊維・長石・石英	橙褐色	普通	R L 縄文	S I 2 覆土
13	縄文土器	-	(3.8)	-	長石・石英	橙褐色	普通	半截竹管文・L R 縄文	S I 1 覆土

第4節 総括

上耕地遺跡は北西から南東に延びる猿島台地の南端側に位置する。旧古河市域にあって、向堀川に面する大山区は比較的遺跡の分布が希薄であるとされる。一方、この向堀川東岸の旧総和町地区の女沼川に面する台地上には多くの遺跡が知られており、羽黒遺跡（文1）、釈迦才仏遺跡（文2）などが調査されている。古河市域は旧石器時代から中近世に至る多くの遺跡が確認されているが、とくに、古墳時代に入ってから遺跡数が増大することが指摘されている（文3）。本遺跡も、こうした傾向の一環のひとつに掲げられると考えられる。

今回の調査区は上耕地遺跡にあって、向堀川に面する台地端からやや内に入った平坦な地点に位置している。前掲報文に示すように古墳時代前期後半の住居跡4軒が検出されたが、精査したにもかかわらず土坑・溝・小ピットなど他の遺構は認められなかった。しかしながら、調査区内からは旧石器時代のナイフ形石器をはじめとして少量ながら縄文時代前期・後期の土器片が検出された。このことは上耕地遺跡における人々の痕跡が古墳時代前期にとどまらないことを示唆している。そもそも、1976年の古河市分布調査で縄文時代中・後期、1984年の分布調査報告では縄文時代前期の遺跡として確認されており、今回の調査では遺構の検出はなかったが、両踏査の結果を一部追認した形となっている。

本調査によって住居跡4軒が検出されたわけであるが、出土の遺物なども踏まえて、これら住居跡群の在り方を考えてみたい。住居跡はいずれも重複することなく、第1・2・3号住居跡は6～10m程の間隔をもって存在している。これら4軒とも基本的には北～北西方向を主軸としているが、主軸方向がやや異なる第4号住居跡は最も近い第2号住居跡とは15m程離れている。住居跡の形状は隅が幾らか丸みを持つ方形ないしは長方形をなしている。規模から言えば第4号住居跡が8m台で最も大きく、次いで第1号住居跡が7m台、第2号住居跡が6m台、そして第3号住居跡が4mと最も小さい。前述の羽黒遺跡では8m台を超える規模の住居跡は検出されておらず、大型の住居跡となっている。しかしながら、規模の割には主柱穴とみられる柱穴が認め

られず、壁外上に上屋を支えた柱穴が存在することが考えられたが、その痕跡を見出すことができなかった。とくに、柱穴が検出できなかった第2・3号住居跡は既に耕作で失われてしまった生活面上屋を支えた何らかの構築物の存在を想定するしかない。このような傾向は本住居跡群に限られたことではなく、上屋の在り方を検討しなければならないであろう。

床面は第1・3号住居跡が貼床であり、第2・4号住居跡が直床となっており、第1号住居跡以外はやや軟弱な床面となっている。報文にもあるように、第4号住居跡は有段住居状に中央部が窪んでおり、羽黒遺跡第21号住居跡でも類例が知られる(文4)。炉は各住居跡とも地床炉であり、とくに付帯する施設などはみられなかった。また、調査区外に延びる第4号住居跡以外の3軒の住居跡には貯蔵穴が検出されており、第1・2号住居跡が南西隅に、第3号住居跡が北西隅に位置している。これら貯蔵穴の周囲には段差、粘土貼りなどの痕跡はなかったが、第2号住居跡では袋状土坑のような掘り込みとなっていた。

検出されたこれら4軒の住居跡は細部の異なりはあるにせよ、周溝の欠如、明確な主柱穴の欠如など、比較的等質な構築構造にあると言ってよい。

次に、出土した遺物についてであるが、報文のとおり廃棄の在り方からすると使用・残置状態を表しているとは言えず、被焼した第1号住居跡でさえ同様なことが考えられる。ただ、各住居跡を覆う最上層からは殆ど遺物が検出されず、その黒褐色土の堆積状況から自然堆積であったことが看取され、廃棄した住居の窪みを人為的に全て埋め戻したとは考えられない。こうした経緯を考慮すれば、住居内に検出した遺物は住居の廃絶後間もなく廃棄されたと考えてよいであろう。

出土した遺物の殆どは土器である。第1号住居跡からは壺形土器、甕形土器、高杯形土器、埴形土器、磨石状の石器、第2号住居跡から壺形土器、高杯形土器、砥石、第3号住居跡から甕形土器、小型壺形土器、甌形土器、そして第4号住居跡からは壺形土器、小型甕形土器、埴形土器、高杯形土器、手捏土器などの器種、石器がみられる。壺形土器については口辺部が逆ハの字状に開き、屈曲を持たず口縁部に有段部を構成する例が殆どであり、器面はハケ目調整痕を残すもののヘラナデ、ヘラ磨きされている。甕形土器は素縁でハケ目痕を残し、ヘラナデ調整されているが、東京湾西岸・南武蔵系の台付甕形土器の良好な出土例はみられない。高杯形土器は器面をヘラ磨き調整されるものの、底部はヘラ削り、ヘラナデされるがやや雑な調整が目立っている。また、第3号住居跡では焼成前穿孔の甌形土器が出土している。各住居からはこうした土器の器種がみられるが、器台の出土が全くみられない。一方、近隣する時期の羽黒遺跡の集落では台付甕形土器やS字状口縁台付甕形土器、器台形土器など豊富な器種が認められるが、ここでは単純な器種構成となっている。こうした土器の在り方から本住居の土器はほぼ4世紀後半の位置を占めるものと考えられる。土器以外には磨石状の石器、砥石がある。第1号住居跡の磨石状の石器はしばしば弥生時代後期の遺跡からも知られる石器であるが、ここではその用途は不詳である。第2号住居跡の砥石は鉄器の存在を前提にしてよいかもしれない。また、第1・2号住居跡では粘土塊が壁下で出土している。床面からやや浮いた状態で出土しており、ある程度住居内に覆土が流入した段階で遺棄されたことが看取される。どのような用途のもとに採取、保管されていたのか不詳であるが、第1号住居跡では試し焼きされたような粘土紐状の土製品が同時に検出されており、こうした粘土塊の用途を考えるにあたって興味深い在り方である。

前述のように4世紀後半に入ると、本地域では遺跡の増大が指摘されているが、上耕地遺跡の出土土器を見る限り、個々の集落成立条件にばらつきがあったように理解される。しかし、そのことが政治的事由なのか、生業に係わる事由なのか推察の域を出ない。今後、本地域における調査例の進展をもって考えてみたい問題である。

以上のように、今回の上耕地遺跡の調査は調査範囲が一部であったとは言え、多くの知見を得、いろいろな問題を提起した。開発地域内の細緻な試掘調査にもかかわらず、ここに報告した4軒の住居跡を検出したのみであったが、住居跡の位置間隔からすると区域外にも住居跡が拡がっていることが十分に考えられる。しかし、住居の重複もなく、覆土の在り方からすると短期間に営まれた小規模な集落であった可能性もあり、問題究明にあたって、さらに上耕地遺跡の調査・研究が待たれるところである。

なお、末文ながら、調査にあたって多くの方々のご協力・ご援助を頂いたことを、ここに改めて感謝する次第であります。

文献

- 文1 駒沢悦郎 『羽黒遺跡 一級河川女沼川河川改修工事事業地内 埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 茨城県教育財団文化財調査報告 第202集 2003年
- 文2 川津法伸 『主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書－大橋B遺跡 釈迦才仏遺跡－』 茨城県教育財団文化財調査報告 第131集 1998年
- 文3 文1に同じ。
- 文4 文1に同じ。

写 真 图 版



1. 遺跡遠景（東から）



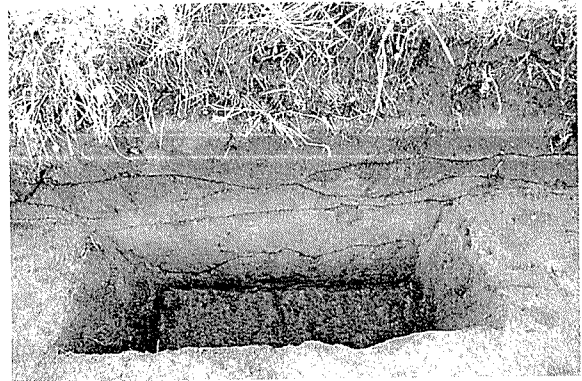
2. 遺跡近景（北東から）



1. 遺構完掘状況



2. 調査区南壁土層断面(1)



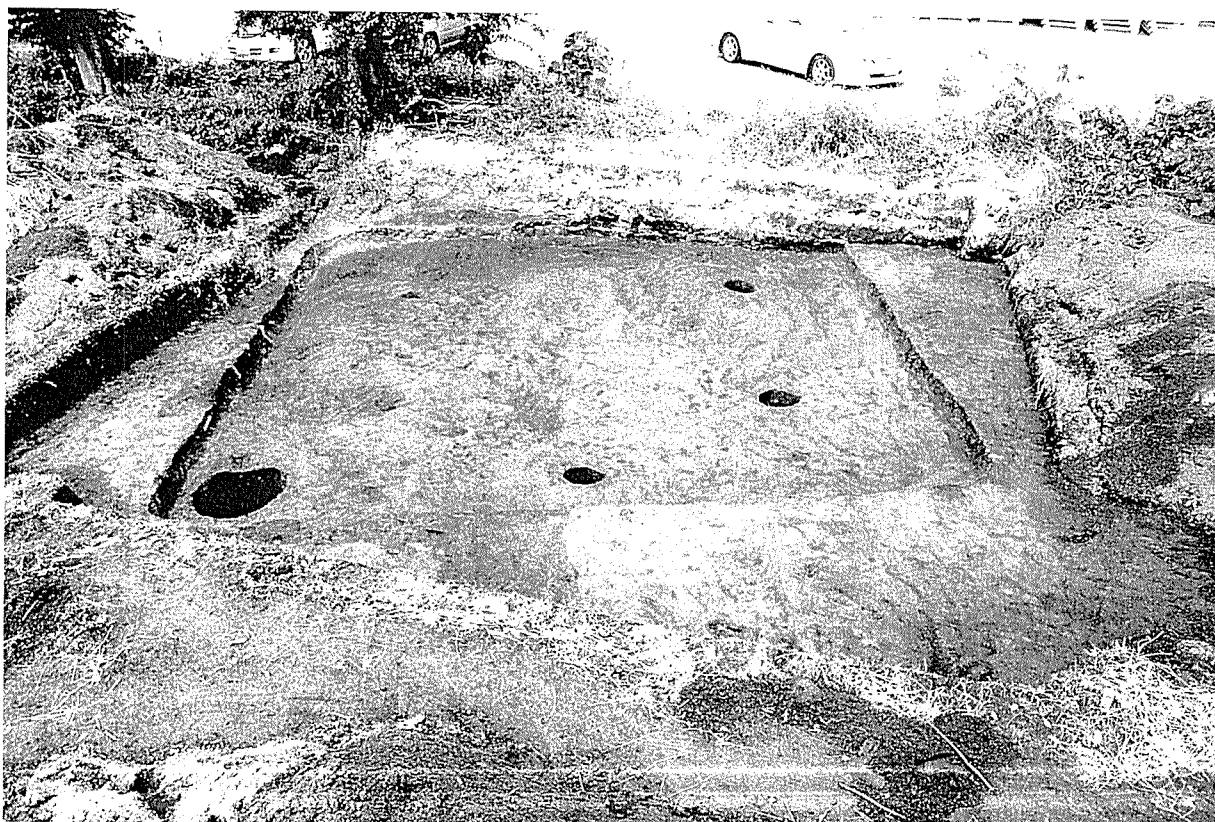
3. 調査区南壁土層断面(2)



4. 遺構確認状況



5. 遺構発掘状況



1. 第1号住居跡



2. 炉



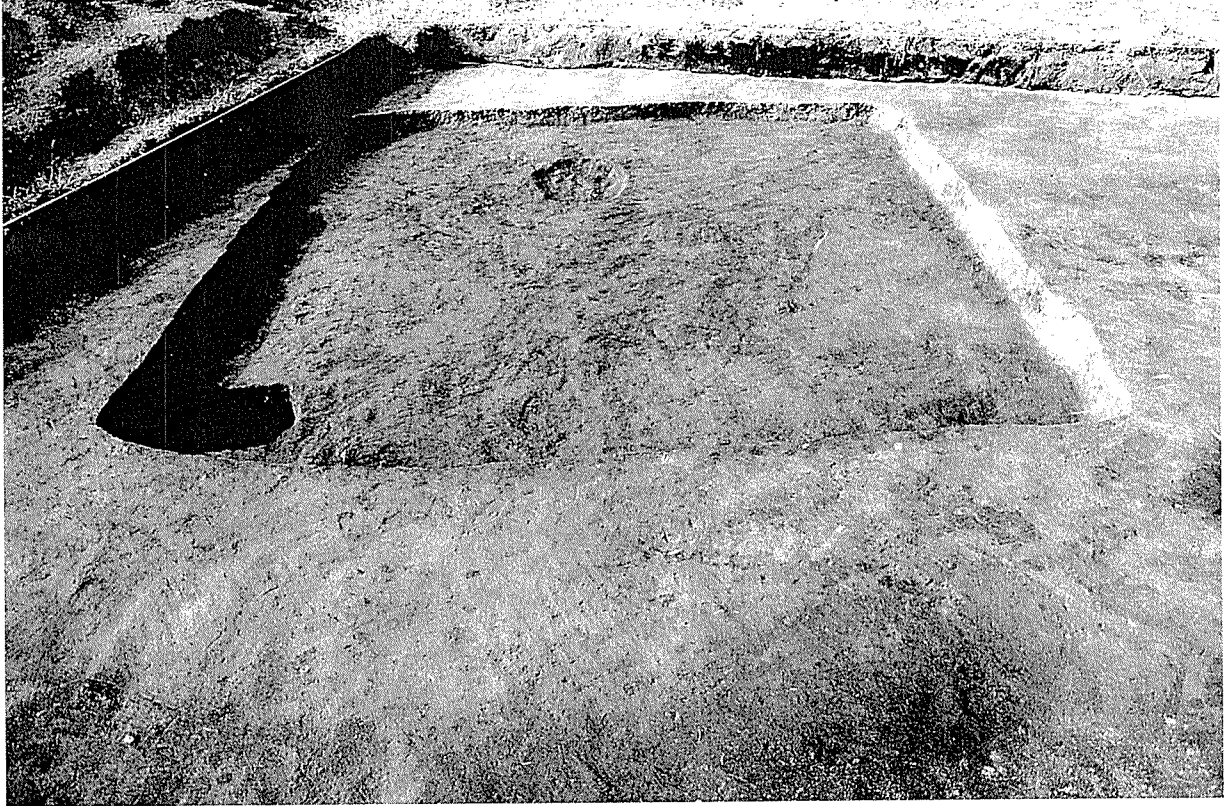
3. 貯蔵穴



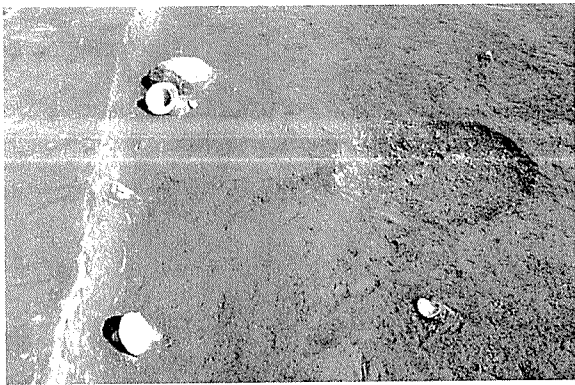
4. 遺物出土状態



5. 南辺炭化材出土状態



1. 第2号住居跡



2. 炉



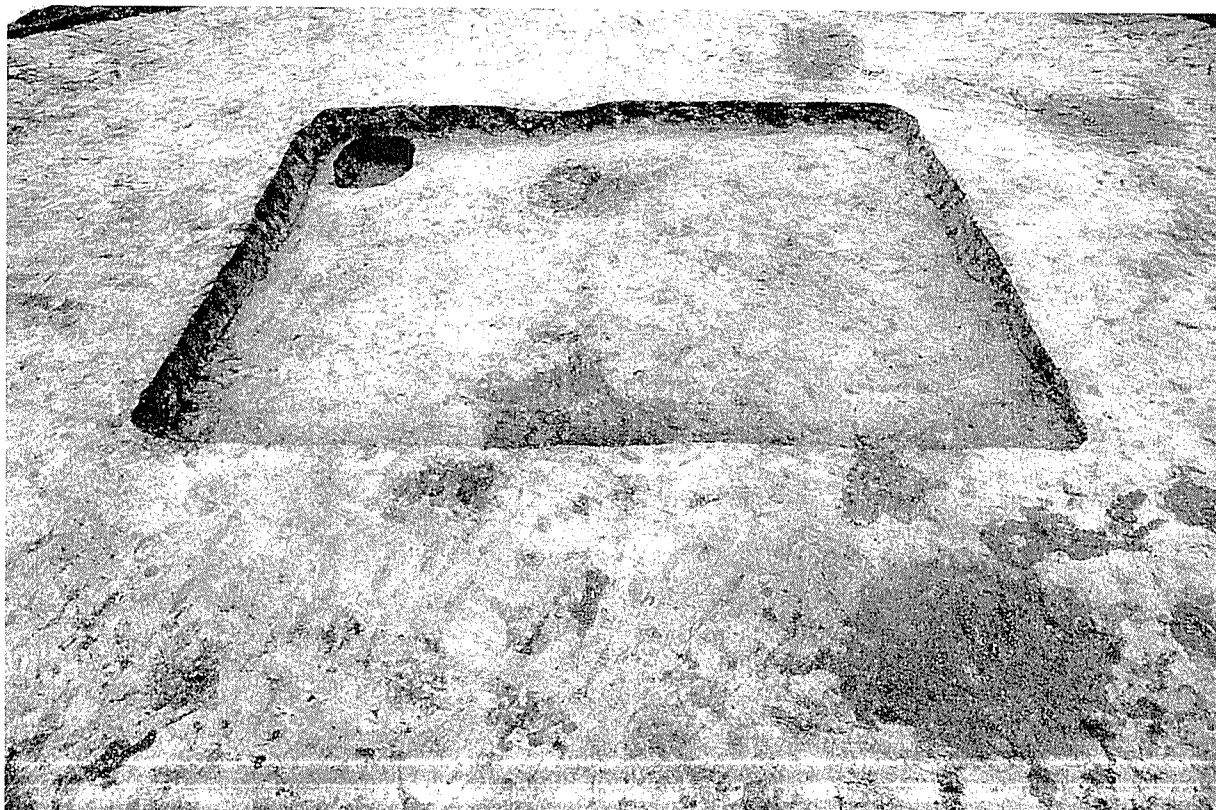
3. 貯蔵穴



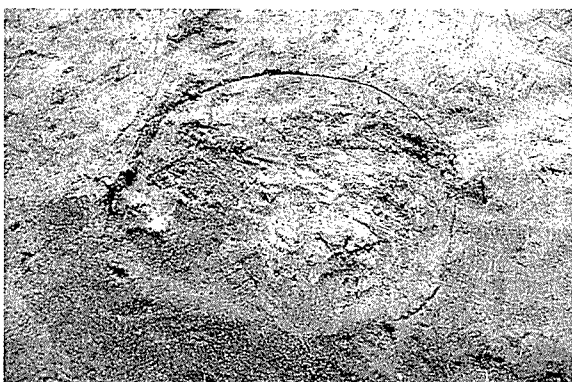
4. 貯蔵穴土層断面



5. 遺物出土状態



1. 第3号住居跡



2. 炉



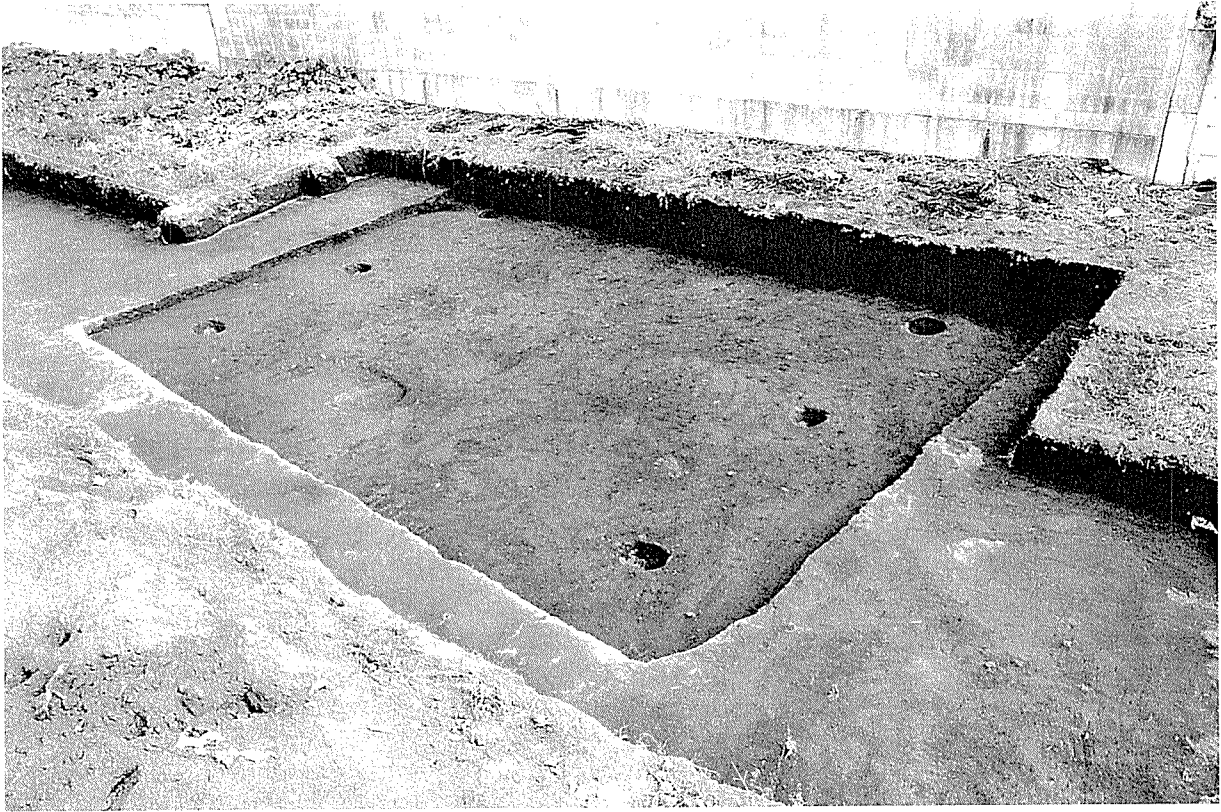
3. 貯蔵穴



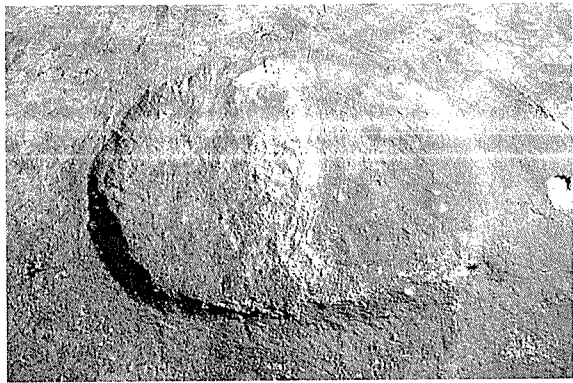
4. 貯蔵穴内遺物出土状態



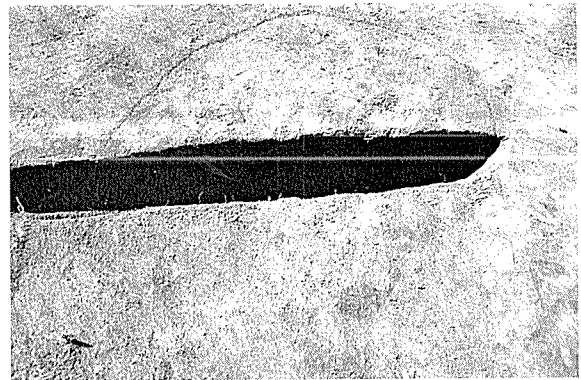
5. 遺物出土状態



1. 第4号住居跡



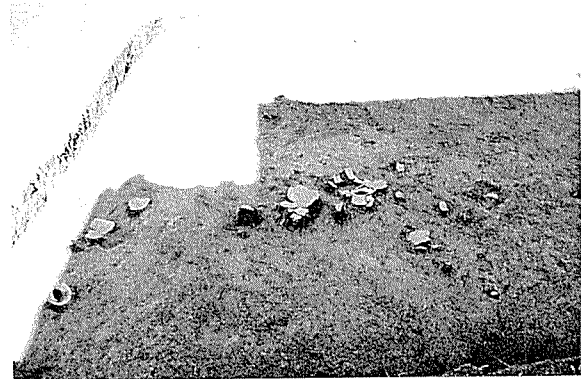
2. 炉



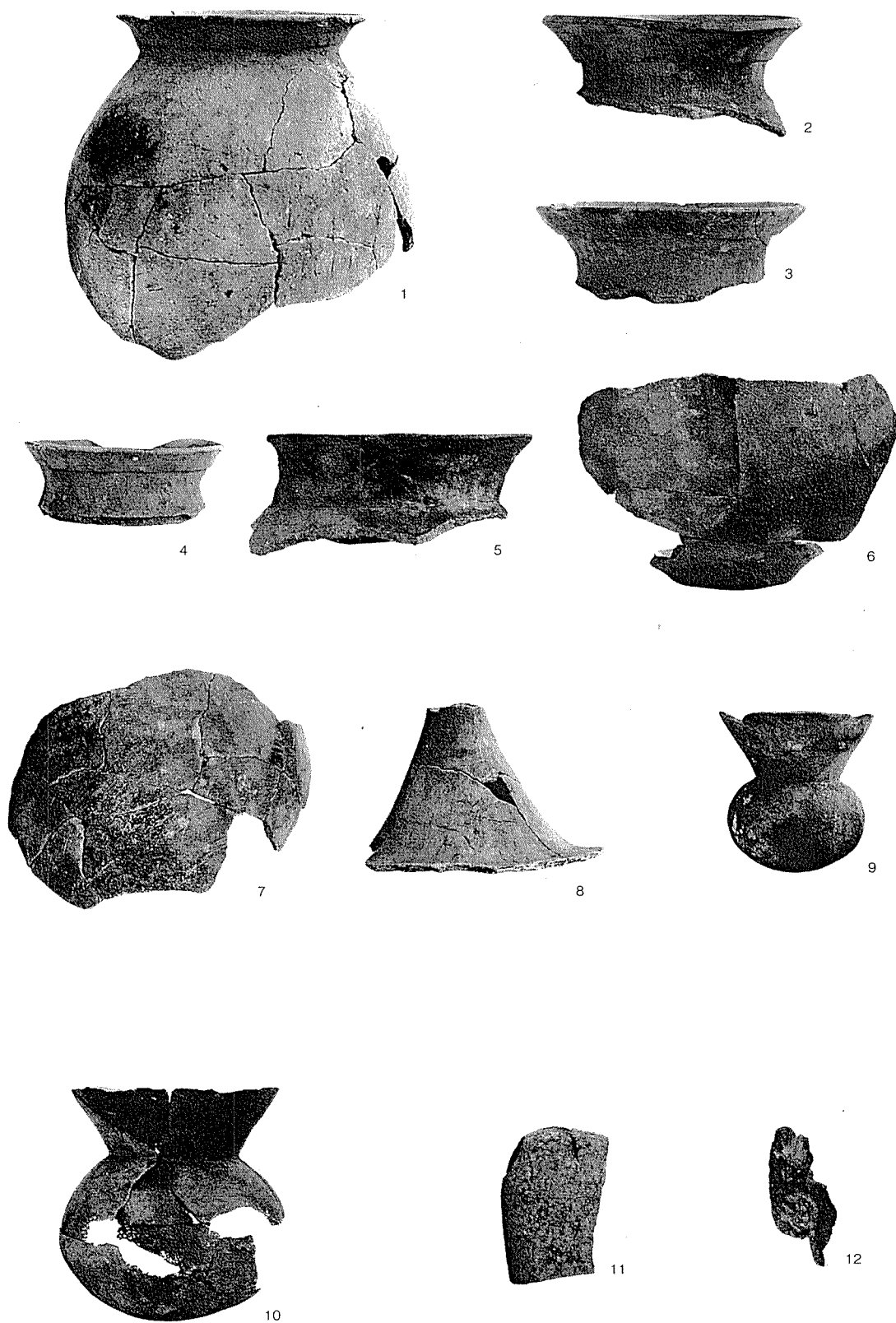
3. 炉断面



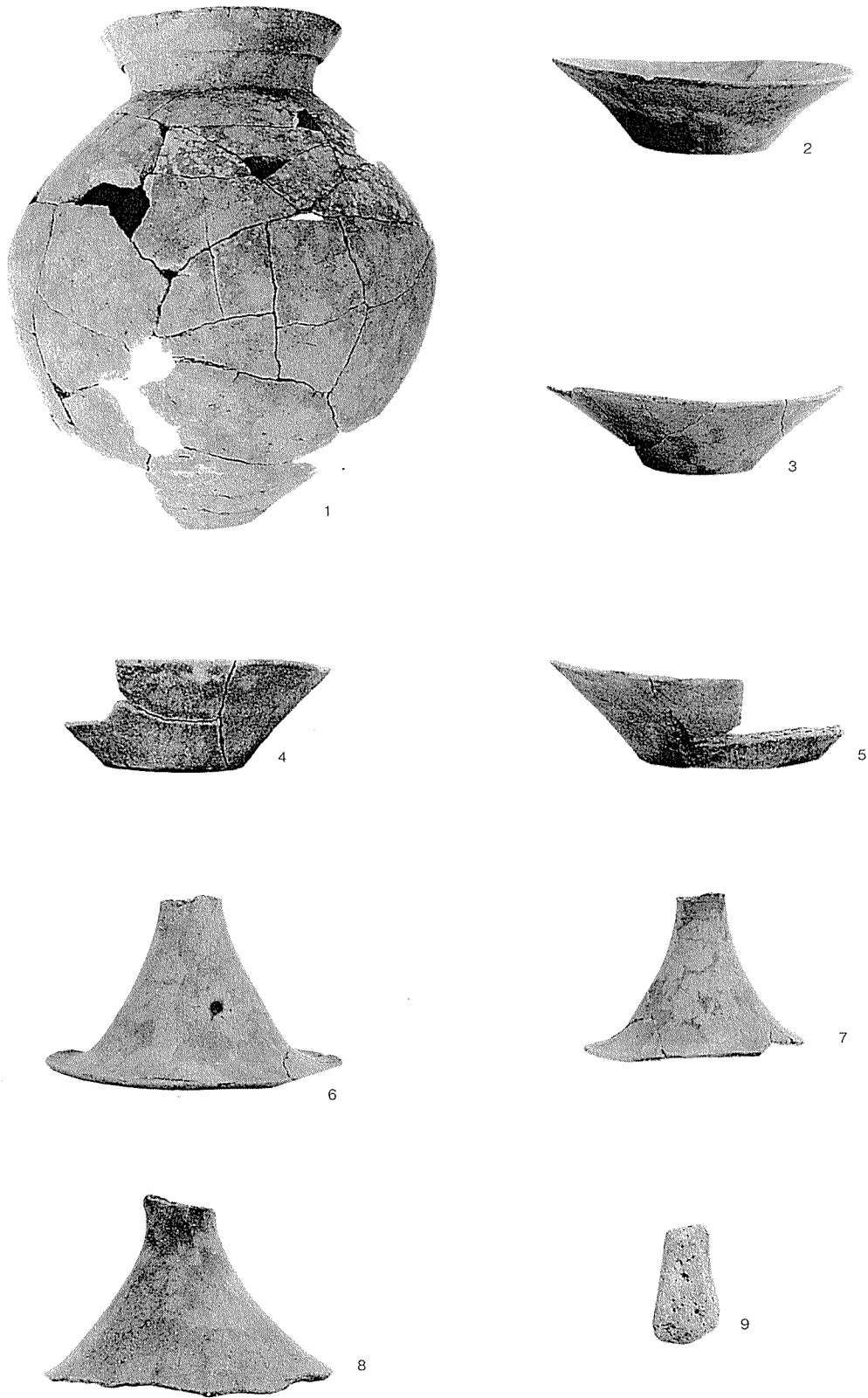
4. 遺物出土状態(1)



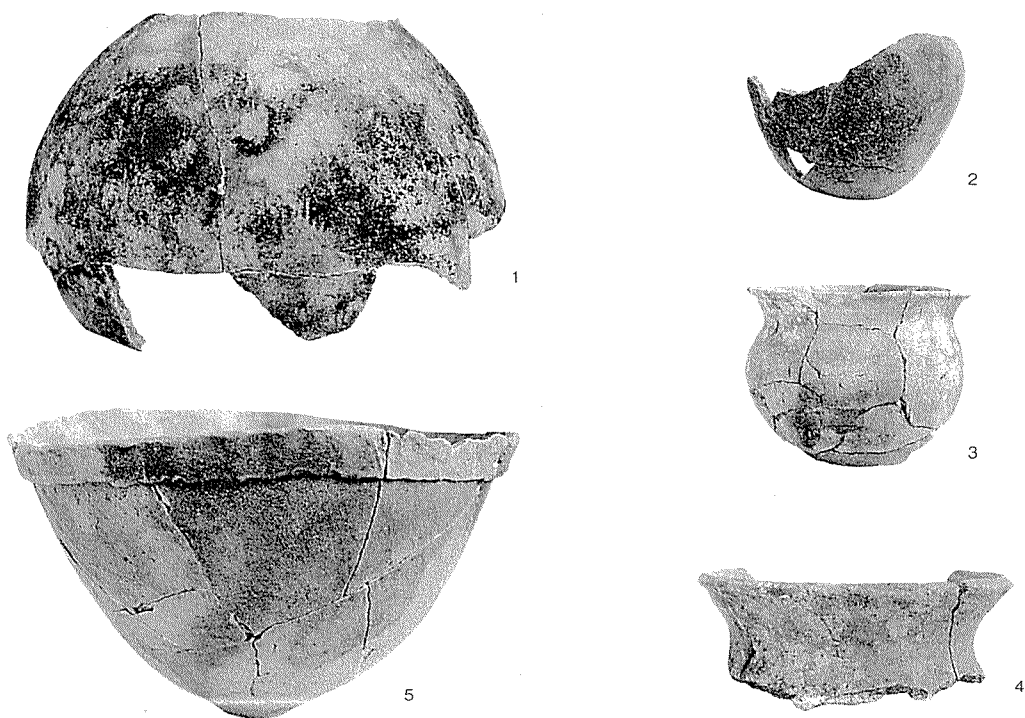
5. 遺物出土状態(2)



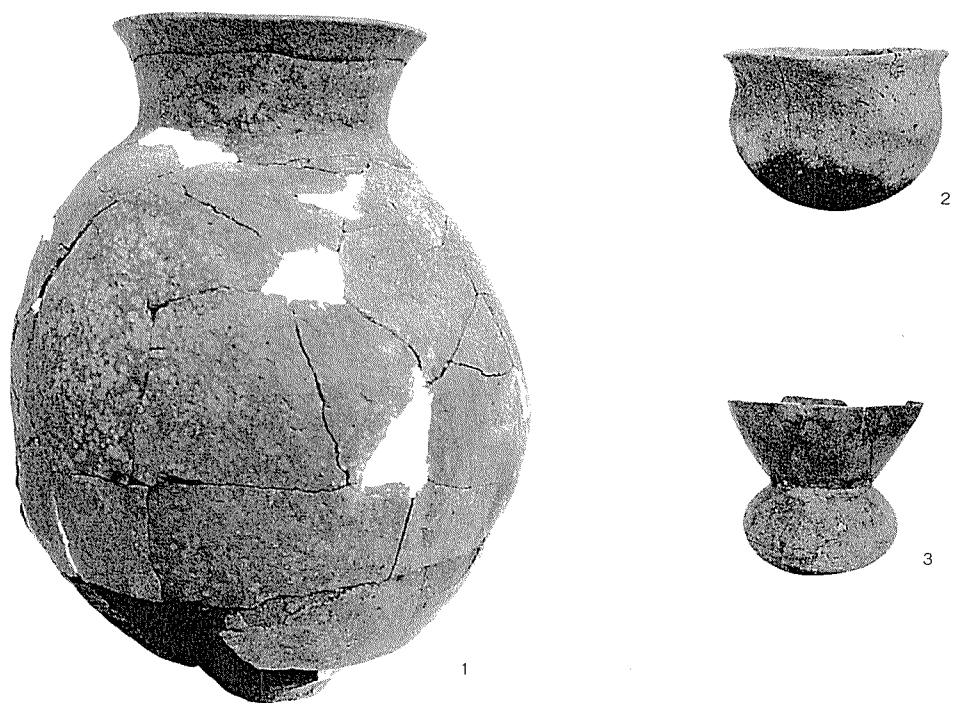
第1号住居跡出土遺物



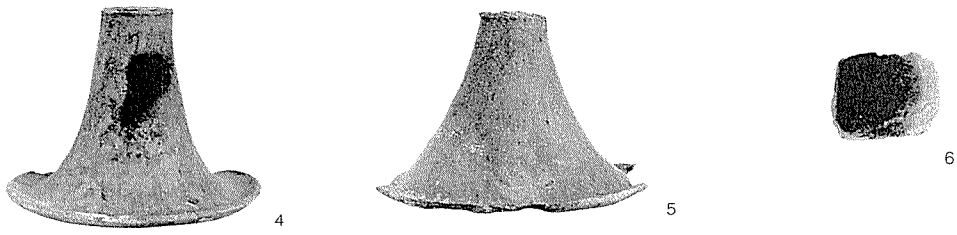
第2号住居跡出土遺物



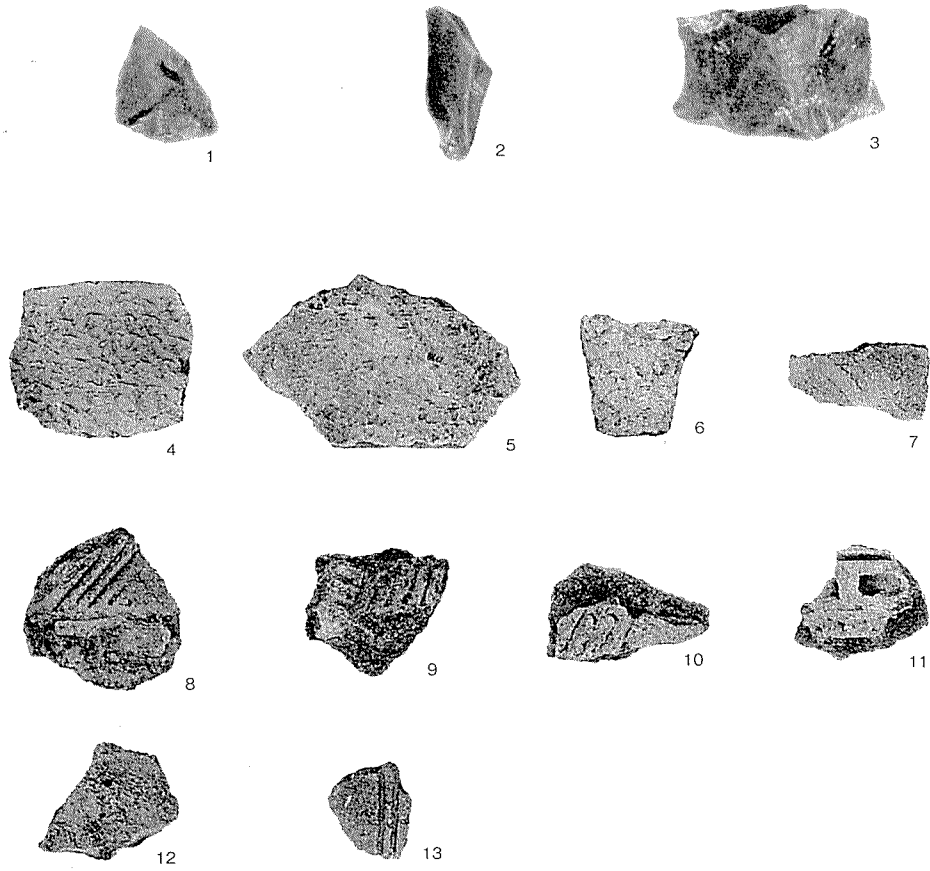
1. 第3号住居跡出土遺物



2. 第4号住居跡出土遺物(1)



1. 第4号住居跡出土遺物（2）



2. その他の遺物

抄 録

ふりがな	かみこうちいせき							
書名	上 耕 地 遺 跡							
副書名	倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	古河市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	柿 沼 修 平・渡 邊 大 士・宮 本 武 美							
編集発行機関/ 所在地	(株)ブリリアントフューチャー / 〒306-0400 茨城県境町2147-62 (有)原史文化研究所 / 〒285-0835 千葉県佐倉市畔田177 古河市教育委員会 / 〒306-8601 茨城県古河市長谷町38-18							
発行日	2008(平成20)年1月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみこうちいせき 上耕地遺跡	いばらきけん こが しおおやま 茨城県古河市大山 あざかみこうち 字上耕地1758-1	08204	022	36° 09' 16,4002"	139° 43' 48,9393"	20071017 ～ 20071102	650	倉庫建設工事に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上耕地遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 4軒		土師器(壺・甕・小形 壺・高杯・埴・甌), 石製品(砥石), ナイフ 形石器, 縄文土器			
要 約	向堀川右岸台地上, 古墳時代の集落跡である。東西軸8mを超える大型住居跡1軒を含む古墳時代前期後半の竪穴住居跡4軒を検出した。また, 調査区北東部で検出した竪穴住居跡は, 焼失住居である。いずれの住居跡も重複はなく, 壺, 甕, 埴, 高杯などが出土している。							

出土遺物及び図面等の取扱いについて

項 目	内 容
水 洗 い	・出土遺物全てについて行った。
注 記	・手書きによる。例) KKK-S11-001 のように注記した。
復 元	・接合は必要に応じて最小限行った。
実 測	・遺物実測図は報告書記載分についてのみ作成した。
台 帳	・遺物台帳, 図面台帳, 写真台帳があり, 検索が可能なように作成している。
出土遺物収納状況	・出土遺物については, 報告書使用と未使用に分け, 遺物収納箱に収めた。各箱には収納内容を明記している。なお, 未使用分については種別毎に分類, 収納してある。

古河市埋蔵文化財調査報告書 第1集

上耕地遺跡

— 倉庫建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成20(2008)年1月20日 印刷

平成20(2008)年1月31日 発行

編 集 有限会社 原史文化研究所

発 行 古河市教育委員会

印 刷 株式会社 弘文社

〒272-0033

千葉県市川市市川南2丁目7番2号

TEL 047(324)5977